ISSN 0289-4130

研究紀要

第17号

2002

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

研　究　紀　要

第 17 号

2002

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　　次

序

［論文］

砂川期の基礎的研究(1) ……西井　幸雄（　1）
—大宮台地、武蔵野台地、相模野台地を中心として—

諸磯式土器の変遷過程……細田　　勝（ 29）

大宮台地における環濠集落の基礎的研究(1) ……福田　　聖（ 61）
—井沼方遺跡—1—

手焙形土器の形と型……高橋　一夫（ 91）
—足守川遺跡群を中心に—

埴輪の地域性……若松　良一（101）
—紀伊の埴輪のありかたから探る—

古代東国と豪族の家……田中　広明（129）

諸磯式土器の変遷過程

細田　勝

はじめに

筆者が以前に諸磯式土器を検討した際に、黒浜式から諸磯式への移行期における土器群の変容過程、あるいは諸磯式自体の変遷について、土器群の相対的な変化の方向性を分断するような提示となってしまった（細田　1999）。言うまでもなく、黒浜式や諸磯式土器については長い研究の歴史があり、各型式の定義や系統論・細分論についても多様な見解が提示されているが、ともすれば研究史上の前提に依拠するあまり、土器群の変化の志向性あるいは方向性をとらえることなく、結果として型式の定義論や型式における細分の枠内に閉じ込めている傾向が強いように感じられる。型式学的研究における呼称は、あくまで土器を把握するための手段に過ぎず、単なる枠の提示では多様な土器の変化・変遷や変質について把握することが難しいように考えられる。

今回の検討では、黒浜式の中葉段階から諸磯b式までの土器群を対象とし、細分論からは距離をおき、土器群を相対的に捉え直すことを目標とした。従って、本稿では従来の型式学的な呼称方法とは別に、各段階の特徴をもとに、画期となるべき定点を設定し、それぞれを縦区画成立段階・組み合わせ鋸歯文段階・単位文段階として提示した。縦区画成立段階は黒浜2式あるいは黒浜式中葉、組み合わせ鋸歯文段階は黒浜3式から諸磯a式の古い部分に、単位文段階は諸磯a式新段階から諸磯b1式段階までの土器群を指している。この間には多少の変遷も存在することからさらに小区分が可能となるが、文様構造に大きな変化は認められない。

このような時期区分を行った背景には、一つには黒浜式から諸磯a式にかけての関東東西地域の地域差に根ざした変容過程の相違にあるとともに、諸磯a式からb式にかけての土器群の連続性にある。これらの段階をみてゆくと、土器の変化が時間の経過による産物と即断しがたい様相が存在するとともに、新旧の基準として把握された土器群の根底にも、構造的には同一の原理が内在しており、この間に型式名称の変更や区分の変更を行うことが、結果として一連の土器変化の本質を見失う結果を招来すると考えたために他ならない。もう一つには、諸磯a式以降の変化がいわば黒浜的な世界から諸磯的な世界へ、どのように変容して行ったかを眺める手段として上記の区分を採用した。

このような変遷観が他地域他系統の土器群とどのように結びつくかは、以下で触れるところとなろう。どのような基準で土器を眺めるかは既に多くの先学諸氏が検討を加えているところであるが、ここでは従来の型式論・細分論をやや離れて、上記の呼称法のもとに、有意な土器の変化とその意味の抽出に腐心したつもりである。一口に黒浜式・諸磯式といっても、実際には様々な系統で成り立っており、それ故に広大な時空的背景を従えていることは疑い得ない事実である。また個々の系統を俎上に載せたとき、絶えず新旧の様相に悩まされる。一見したところの新旧の差異が時間差の産物と即断できないことも多々認められるところであり、時間軸の推移にもまして地域間の横との関係性が大きな意味をもっていることの証でもあろう。このために結果としては圧縮した変遷観と

なっている点は否めないであろう。前置きはともあれ、先ずは本論に進むこととしよう。

1　黒浜式中葉土器群の評価

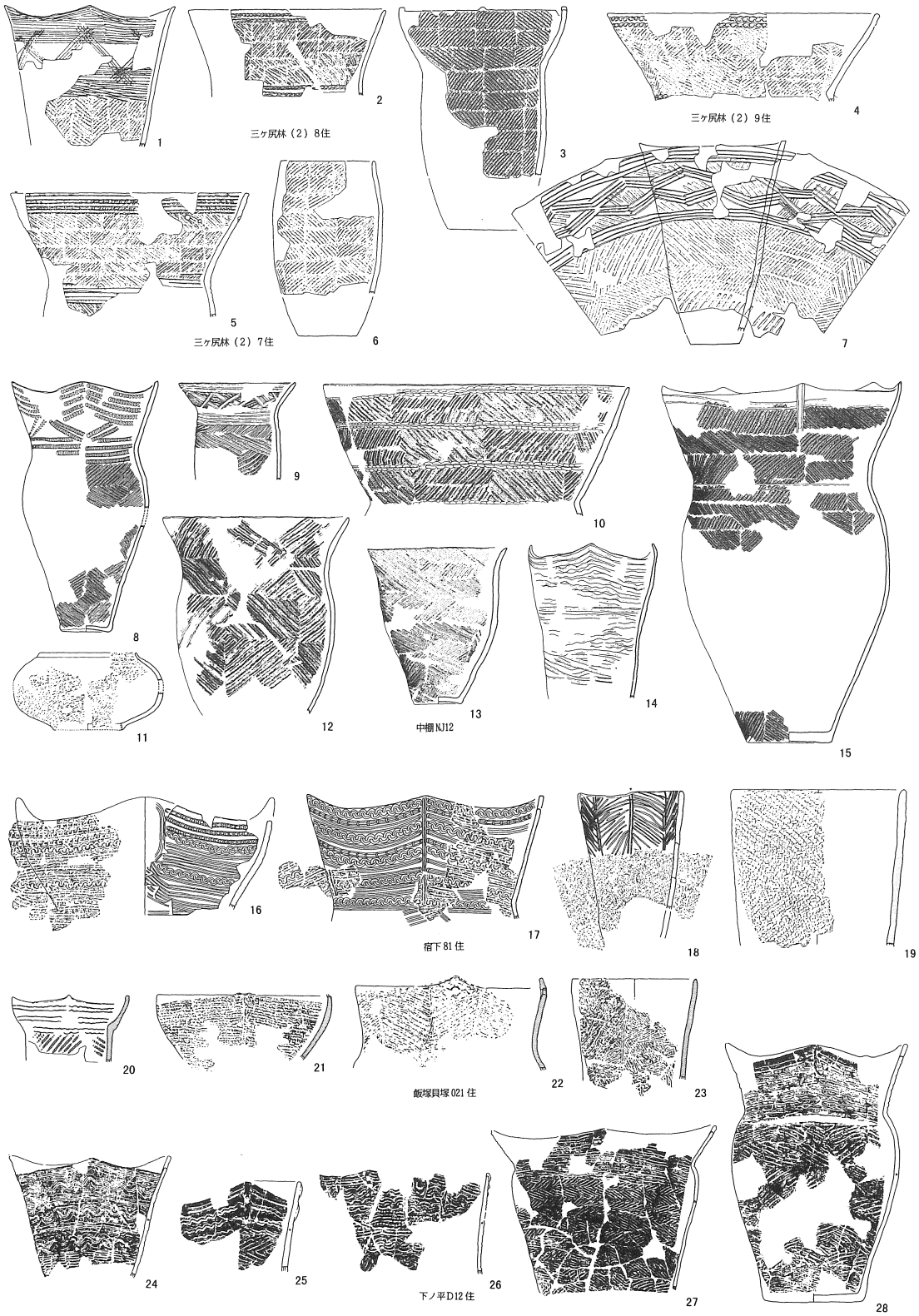
先ず、組み合わせ鋸歯文段階の土器を論ずるにあたり、先行する段階の土器群について若干の検討を行っておきたい。黒浜式土器を大局的に見ると、およそ3段階の区分が可能である。この区分は新井和之氏による一連の黒浜式土器研究（新井　1979・1982・1985）の成果に負うところが大きく、これは今日の黒浜式土器研究の定点ともいえるものである。しかしこのなかで示された第5段階は、設定当初からその実態が明確ではなく、遺構一括の単位で捉えられる資料にも乏しいことから、「諸磯a式への型式学的変遷を明確にするための理論的要請から設定された段階」（鈴木　1994）との評価が与えられていた。関東東部の古段階では関山式の系統上に展開し、器面全面を縄文で飾る土器群が主体的である。この地域の土器群は、羽状施文を堅持し、当初は施文幅ごとに原体を異にして、比較的幅の狭い羽状構成を施文しており、多層ループ文が施文されるものもしばしば認められる。施文毎に、または対向する位置で施文原体を変えることから、全体としては幅狭い菱形施文を意図した土器群が多いことも古い部分の特徴といえよう。

黒浜式の中葉段階・本論での組み合わせ鋸歯文前段階に至ると、縄文施文の土器には、単節・附加条縄文等により、器面に対して同一方向に施文を重ねることによって比較的大振りな菱形状を意図する土器群が出現するようになる。これらの土器と共に、粗雑な縄の多様に象徴される非常に粗製的な土器が伴っていることがこの段階の土器群の実態であろう。

関東北部域では、古段階以降、東北地方に口縁部文様帯の系譜が求められる大形菱形文土器が主体的に展開している。大形菱形文土器はその名の示す如く、沈線による菱形構成を基本的な文様図形として採用している。この種の土器群は、当初から4単位波状口縁を文様図形の一部として積極的に組み込んでおり、波状と逆向きの図形を描くことで作り出された菱形構成を遵守する土器群である。この土器の基本形は菱形文が変遷する過程でも一貫しており、例えば黒浜式中葉段階の良好な一括資料である中棚遺跡（富沢　1985）12号住居跡出土土器においても基本図形に変化は認められない。

この段階の縄文施文の土器には、先にも触れたように横施文ごとに原体を変更せず、幅広い鋸歯状施文を意図したものや、横位八単位施文を意図したものが多いことから、工具による菱形文構成が縄文施文に置き換えられてゆくかの如き様相を呈している。

中棚遺跡12号住居跡出土土器（第1図8～15）は黒浜式中葉段階の良好な一括資料であるが、以上の点に関して示唆に富む土器組成を示している。器形および縄文施文の変換点にコンパス文が施文された土器（第1図10）をみると、三ヶ尻林（2）遺跡（昼間　1984）7、8、9号住居跡で出土した同種土器（第1図2、4、6）との施文上の共通性が、また器面全面にコンパス文と平行沈線文が交互に施文された土器（第1図14）では、下ノ平D遺跡（堀江　1995）12号住居跡出土土器（第1図24）との類似性が伺える。前者は八単位の縄文施文による菱形構成であり、米字文の祖形となった土器として、後者はこの段階の黒浜式にしばしば伴出する土器で、大木式2aとの関係を考える上で重要な位置付けが与えられる。



第１図　黒浜式中葉（縦位区画文段階）の土器群

組み合わせ鋸歯文前段階にしばしば伴出するコンパス文の土器は、大木2a式の古い段階から、側面環付き縄文や葺き瓦状撚糸文とともに、組成の主体を占める土器として定着しているが、本来的な系譜関係は東北内在のものではないようである。大木2a式土器は直線的に開く深鉢を主に、全面横構成を基本としており、口唇直下に貼付を有するものがしばしば認められるが、本来的に口頸部を貫通する縦区画の要素をもたない土器である。下ノ平D遺跡では、底部から直線的に開き、全面平行線とコンパス文の重畳施文の土器（第1図24、26）と、口頸部と胴部とで施文構成を変えた深鉢（第1図25、27～28）があり、関東の該期の土器群と器形・文様帯構成に共通性が窺える。また口唇直下に曲線的なあるいは直線的な貼付文が施された土器（第1図25～28）があり、屈曲部上半の口頸部が幅狭い土器に関しては、縦区画の如き貼付文が施された個体もあるが、文様帯区画下端にまで達していないことから、縦区画ではなく口唇端部の貼付文と見るべきであろう。中棚遺跡12号住居跡で出土した波頂部直下に縦位の沈線をもつ資料（第1図15）や原町西遺跡（鈴木素 1985）号住居跡出土土器などは、口唇部に貼付された隆帯の沈線への置換と考えられるものである。

この段階には黒浜式の土器組成が大きく変化し、宿下遺跡（小宮　1995）81号住居跡（第1図16～17)、飯塚貝塚（奥田　1989）021号住居跡（第1図20～23）や下手遺跡（大宮市　1961）出土土器に代表されるように、口頸部文様帯が波頂部から垂下する縦区画によって分割された土器が出現する。口頸部の文様構成は平行線とコンパス文の重畳施文である点は、大木2a式との強い関係が窺えるが、縦区画線の系譜は隆帯による器面分割に由来すると考えられることから、大木2a式とは系譜関係を異にするものであろう。宿下遺跡一括資料からも明らかなように、黒浜式の組成の一つである肋骨文土器はこの段階に現れるものであり、これも縦区画構成の表現形態の一つと見てよいであろう。但し、肋骨文の単位構成は不規則で4単位を採用するものがほとんど見られないことから、直接的な影響関係と考えることは難しいようである。このように従前からの横展開の構成を堅持しつつも、本来的に系統を異にする縦区画の要素を在地の土器に取り入れ、新たな土器を生み出したことがこの段階の関東東部地域の特徴で、この状況は以降も堅持される。北関東ではこの段階が大形菱形文の衰退期に相当し、同時に組み合わせ鋸歯文を生み出す素地を形成したものと考えられる。このようにみると、黒浜式中葉は、関山系・大形菱形文系から新たな土器を生み出して行く転機となった段階と評価できるであろう。

上述のように大形菱形文の終焉期では、工具施文の菱形構成から縄による菱形構成に変換した時期でもある。それと共に、縦区画の土器が関与することによって、横帯構成の土器と縦構成の土器が存在するという、大別2系統の並存が出現した段階とも評価することができる。

口唇部文様帯の系統に関しても示唆的な資料がある。口唇部と並行して、2乃至3条の竹管文を施して口唇部帯を形成する土器は大形菱形文に伝統的に認められる。口唇部以下の文様構成に差異はあるものの、宿下遺跡81号住居跡、木津内貝塚Ⅲ次5号住居跡（奥野・小宮　1999)、あるいは横倉宮ノ内遺跡4号住居跡出土土器の竹管文列も相同の部位と見なしえるであろう。一方で下手遺跡の口唇部二条の竹管文は、コンパス文の置換と見なされるものである。このように口唇部帯の形成に関しても、大形菱形文と縄文施文の土器群が相互に関与しており、同一器形・同一文様帯からの連続的な推移だけではなく、地域的・系統的に異なる相似の部位が互いに影響しあう現象である

ことがわかる。下ノ平D遺跡出土土器にみられた口唇部貼付文と口唇に並行する沈線文は、口唇部が次第に屈曲し、口唇部帯としての表現が明確となってゆく。このような背景を持って生起した口唇部帯は、組み合わせ鋸歯文古段階では附加条施文の土器にも広く定着しており、なかにはコンパス文系の土器に見られた、末端を閉塞する平行沈線描出手法を受け継いだものも存在する。組み合わせ鋸歯文新段階のいわゆる諸磯a式の口唇部帯もこの系統上に存在するものであるとともに、諸磯式を通して継続されてゆくのである。

2　組み合わせ鋸歯文段階の土器群

1）黒浜式土器研究における組み合わせ鋸歯文の位置付け

黒坂禎二氏は羽状縄文系土器群を検討する中で、米字文土器が縄の置換として成立したこと明らかにした。田中和之氏は、「組み合わせ鋸歯文」を俎上にのせ、縄の強調からモチーフが独自に展開してゆく様相を想定し、3段階の区分を行った。これは従来の黒浜3式から諸磯a式古段階までの土器群を対象としている。田中氏の言う組み合わせ鋸歯文とは、「米字文」、「ユニオンジャック文」あるいは「糸井宮前類型」と呼称されている文様を、系統上や文様構成の在り方を分析するなかで呼び変えたものである。今回の検討に際しては筆者も氏の呼称を用いている（註1）。

江坂輝弥氏は、かつて諸磯式を水子・矢上・四枚畑・草花の4段階に区分（江坂　1951）した。これは今日の諸磯a式古段階・a式新段階・b式・c式の変遷序列に対応することは周知の事実である。下田町東貝塚の報告（江坂　1938）によれば、繊維土器と無繊維土器が同一住居跡から出土したことから、黒浜式土器からの系統的変遷序列を巡って様々な解釈が行われてきてた。この間の経緯については早坂広人氏の研究（早坂　1995）に詳述されているが、堀越正行氏による水子式の再評価（堀越　1988）と氏の見解に対する批判（鈴木　1994）（早坂　1995）も、黒浜式終末から諸磯a式初頭をめぐる型式の枠組みと編年観の相違を物語るものであろう。この部分は、黒浜式と諸磯a式との型式学的な枠組みの境界線上に位置しているために、概念化の相違によって位置が前後する段階とも言える。いずれにしても、黒浜式と諸磯式との型式学的な範囲の設定と、それに基づいた連続的変遷の追及が課題であったことは一貫しているが、今日的に見れば、研究史上で提示された下田町東貝塚と生見尾村バンシン台（風早台）貝塚出土土器群の編年的位置付け（松田　1999）に帰結する課題である。大局的には、土器胎土の無繊維化によって、器面装飾・地文のレベルにおいても繊維土器とは異なった製作手法を採用することから、このような変化は土器作技法上における一大画期であることは明白であるが、天神前遺跡でも端的に示されたように、繊維土器と無繊維土器群が伴っていることからも、時期区分の指標とはなりえず、文様帯や文様の変化を重視すべき視点（鈴木　1994）は筆者も同様である。

先にも触れたように、黒浜式における文様構成上の大きな変化は、縦区画文様の成立に求められよう。コンパス文と平行沈線文の重畳施文に象徴的にみられたように、この文様構成法の採用と縦区画を基調とする肋骨文の成立は期を一にしていること、および肋骨文が縄の置換によって成立したものであり、肋骨文と附加条縄文全面施文の土器と組み合わせ鋸歯文が密接な関係を有していおり、これらの出現がいわゆる諸磯a式の文様構成と密接に関係していることは疑い得ないであろう。

このようにみると、黒浜２式とされる中葉段階は、大形菱形文系や関山系の系統から離れて、新しい土器構成を採用しており、文様構成上の変革期であるとともに、後続する組み合わせ鋸歯文古段階が諸磯ａ式古段階へ連なる母体を形成していた可能性が高いと考えられる。

黒浜式から諸磯ａ式への変遷過程は、無繊維化によって引き起こされた成形手法・地文・施文工具の変化などの技術面と、文様構成上での型式学的な指標の設定によって、極めて進化論的な変遷観が打ち立てられてきた。しかしながら、一系統の時間経過の描出を意図した変遷観も、地域的な相互比較を通して眺め返すと、様々な様相をもつ土器群が重層的に介在しており、一系的に推移しているとは考えられないことから、土器の型式学的な範囲を定める視点でこの時期が語れるか否かは甚だ難しいように考えられる。このような経緯の中で、組み合わせ鋸歯文の構造分析とその展開および伴出土器との関係を考え直すことで、黒浜・諸磯両型式の関連性を捉えなおすことが可能となろう。

２）組み合わせ鋸歯文古段階の土器

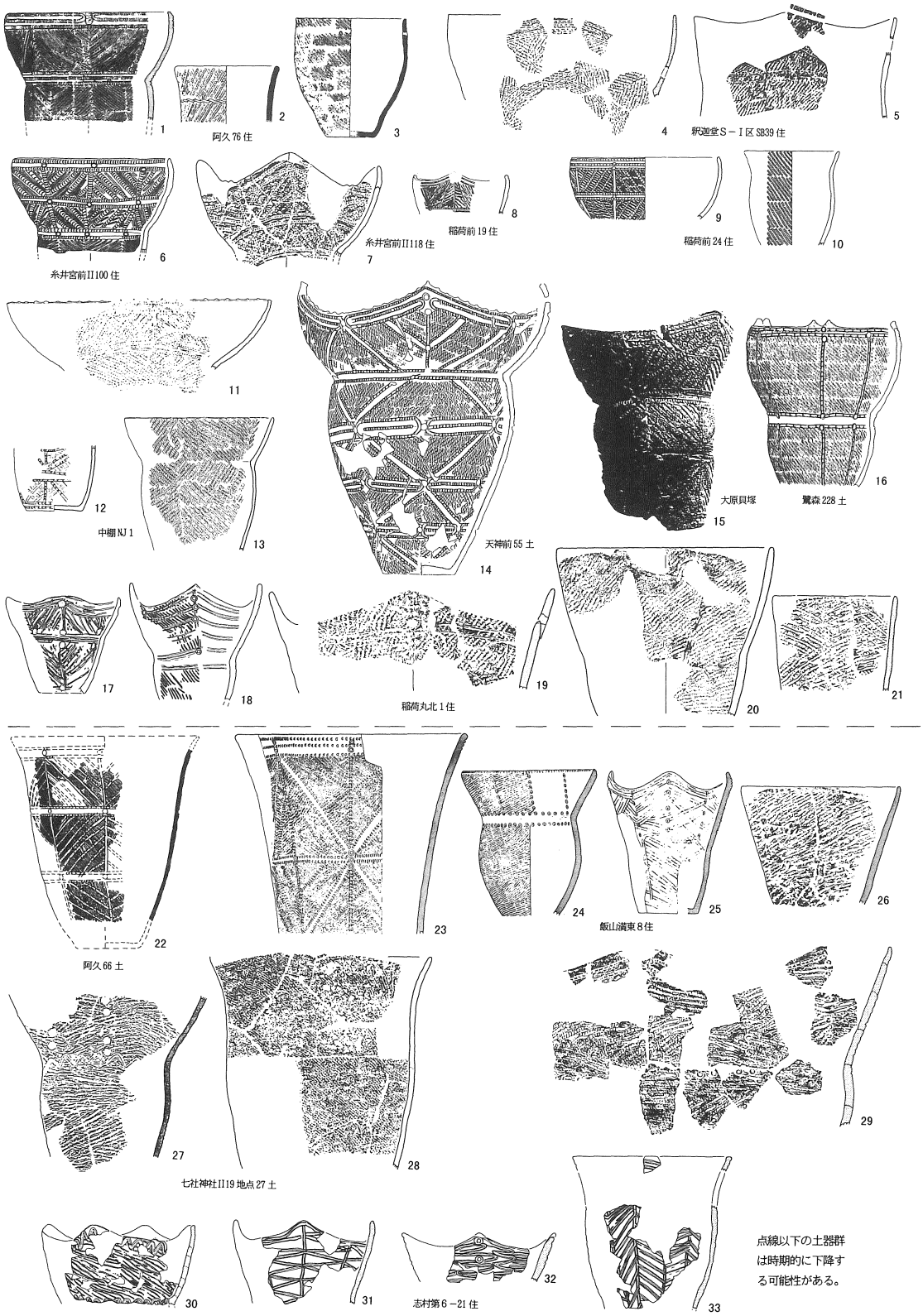
工具施文の土器群

組み合わせ鋸歯文土器は、その名前が示すとおり縄文地上に菱形の沈線を描いた土器であり、「ユニオンジャック文」あるいは「米字文」とも呼称される土器である。その成立にいたる経過は、縄文施文系の土器と沈線文施文の土器との置換関係が前提として存在していることは疑い得ない。ただし米地文の土器は縦区画に支えられることによって成立した土器であり、単に縄と工具との置換関係によって成立したと考えることはできないであろう。前章で、組み合わせ鋸歯文以前に、既に縄と工具文との置換関係が成立していたことと、横帯構成と共に、異系統としての縦区画の構成が象徴的にコンパス文系や肋骨文系に採用された経緯について略記した。この段階で特徴とすべき点は、基本的に横帯構成を旨とする土器群に、新たに縦構成が採用されたことによって、土器群に大別２様相の差異が生じていることであり、組み合わせ鋸歯文はまさにこの差異を象徴するかのような土器として生みだされたものに他ならない。

ここでは、組み合わせ鋸歯文の土器について、その変遷過程と共に周辺の土器群についても併せて検討し、いわゆる黒浜式の新段階から諸磯式にかけての変遷観について提示してみたい。

中棚遺跡12号住居跡や三ヶ尻林(2)遺跡７・８・９号住居跡に代表される縄文施文系の土器群は、基本的には大形菱形文系土器との置換関係を反映したものである。この系統上に成立した組み合わせ鋸歯文土器と相似の構成は、関東東部では第３図に示した出土例のように、主に附加条縄文によって菱形状の意匠に施文される傾向が強く、器形・文様帯構成や、８単位の菱形施文を意図していることからも強い共通性が窺える。反面では、施文原体に制約されているためか、器面に横・縦の区画線を描出する要素が極めて乏しく、縦構成を採用する土器が中葉以降の肋骨文系に限定される傾向が強いことから、大きな地域差として顕現しているようにみえる。

ところで、組み合わせ鋸歯文古段階には、肋骨文土器にも全面に文様展開が図られる個体が多く見られる。追加成形施文法によって器の上下で施文を異にする場合が多い反面、全面施文の土器では、当初から横よりも縦を意図した文様構成に比重が置かれている（註２）。



第２図　組み合わせ鋸歯文古段階の土器群(1)

糸井宮前Ⅱ遺跡（関根　1986）100号（第２図６）・118号（第２図７）・152号、稲荷山遺跡（若月　1985)）19号（第２図８）・24号住居跡（第２図９～10）から出土した組み合わせ鋸歯文土器は典型例と考えられる土器である。このうち100号・152号住居跡出土土器は、地文の附加条第１種による菱形施文上に、条方向に沿って爪形文が施文されていることから、単方向縄文の糸井宮前118号や稲荷山例に先行する最も古い様相と評価されている。関東東部との関係でみるならば、地文上に施文された爪形文は、、附加条原体による施文効果を竹管によって表現した故の併施文の土器とみることもできよう。ただし附加条縄文と条に沿った密接する竹管文施文が、単方向縄文地文に先行する段階として細分できるか否かは問題（註３）であろう。附加条原体は、竹管文施文に比重が置かれるに従い、急速に単方向施文に置き代わってゆくことになるが、この背景には無繊維を土器製作の基本とする、いわゆる釈迦堂Ｚ３式との器形・成形技法・施文原体における相互関係を無視することはできないであろう。

阿久遺跡（笹沢　1983）76号住居跡（第２図１～３）、釈迦堂遺跡（小野　1986）S－Ⅰ区SB39（第２図４～５）では、組み合わせ鋸歯文系統の土器には菱形縄文が施文されている反面、伴出土器は単方向縄文施文の土器である。釈迦堂遺跡SB－39では、含繊維で組み合わせ鋸歯文古段階相当の口頸部羽状縄文施文の土器が、無繊維単方向縄文施文の土器と伴出関係にあり、無繊維土器には、口頸部に磨り消しを有する組み合わせ鋸歯文類似の装飾手法が採用されている。阿久遺跡76号住居跡でもこれと似たような状況を示し、結節をもつ縄文が出土していることから見ても、無繊維化と単方向縄文の採用をもたらす要因が、時間差とみるよりもむしろ系統関係の濃淡を反映したためと考えることが出来るであろう。

関東東部でも、天神前遺跡（奥野・小宮　1999）55号土壙出土土器（第２図15）や大原貝塚（甲野口　1935）出土土器（第２図16）には、菱形構成の縄文施文上に爪形文が施されている。反面、飯山満東遺跡（清藤　1975）８号住居跡出土土器（第２図35）をみると、単方向縄文地上に爪形文が施文されているなど、地文の相違が段階差示すとは考え難い状況である（註４）。この時期には含繊維・無繊維に関わらず、単方向施文の土器が多出する。第３図には関東東部に位置する天神前遺跡５号住居跡、宿下遺跡（小宮　1995）78号住居跡、槙ノ内遺跡（金山　1987）Ⅳ－７号住居跡、鴻巣遺跡（古内　1974）10号住居跡、花前Ⅰ遺跡（田中　1984）118号住居跡出土土器を図示したが、主に附加条上縄文による鋸歯状構成の土器以外には、地文に単方向施文の土器が多いことが明らかである。このことからみても、一概に地文の差異が時間差を示すものとはいえないであろう。

糸井宮前・稲荷山例は内湾傾向の強い口頸部が２段に区画されているが、天神前遺跡55号土壙出土土器は口頸部が１帯で、この差異は、例えば中棚遺跡12号住居跡例と三ヶ尻遺跡例との系統的な差異あるいは天神前遺跡同時期の付加状縄文施文の土器との近似性を示すものといってもよく、器面の横多帯区画や区画間の磨り消しなども前段階の構成をそのまま引き継いでいることは明らかで、構成上の強い連続性が伺える。天神前遺跡55号土壙出土の組み合わせ鋸歯文土器は極めて象徴的である。強く内湾した口頸部と胴部にほぼ均等な幅で横帯構成されるが、器面を全周する横帯区画は口頸部と胴部の区画に限られ、他は鋸歯文間に末端が閉塞する区画が描かれている点は、塚屋遺跡（市川　1983）10号住居跡例（第５図１）や米島貝塚（小林　1965）６号住居跡例（第６図23）に

先行する例で、すべての要素が揃っている土器といえよう。

以上の土器群に共通する点として先ず指摘すべきは、横帯間に縦構成が採用されるとはいえ、器面全体を縦分割する意識には乏しく、あくまでも横帯内部で完結していることであろう。一見すると縦沈線が器面を貫通するように見えるが、横帯間毎に縦区画線のズレが認められることからも明らかである。諸磯a式を伴う塚屋遺跡10号住居跡（第5図2）や芳賀団地遺跡（前原　1990）30号住居跡出土の組み合わせ鋸歯文土器（第5図14～15）は、横帯間に磨り消しを有し、横帯毎の縦区画線にみえるが、横帯区画に先行して縦区画線が描出されていることから、縦区画線で器面を分割する手法は、時間差を伴った差異と見なしえる（註4）のである。

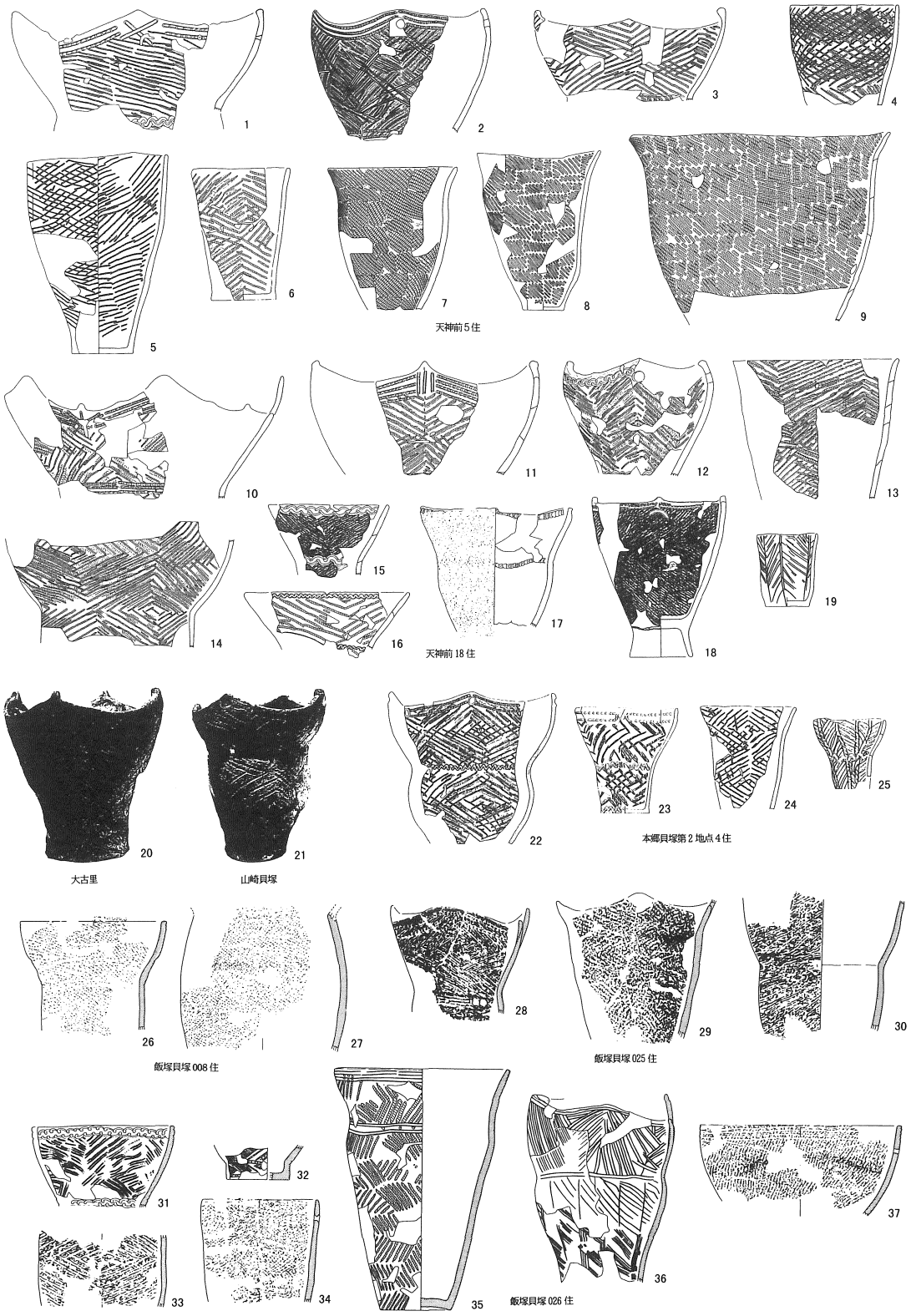
この点、阿久遺跡66号住居跡で出土した口端が外反する組み合わせ鋸歯文土器（第2図34）は、施文工程と手法が糸井宮前遺跡118号住居跡、稲荷山遺跡24号住居跡と同じで、器形は縄文施文の粗製土器に準拠している。施文工程の変化は地文に依存した形からモチーフの主導に移行したことを背景に捉えられているが、縦区画線を切る斜線は肋骨文の描出手法と同じであることも考慮すべきであろう。

附加条施文の土器群

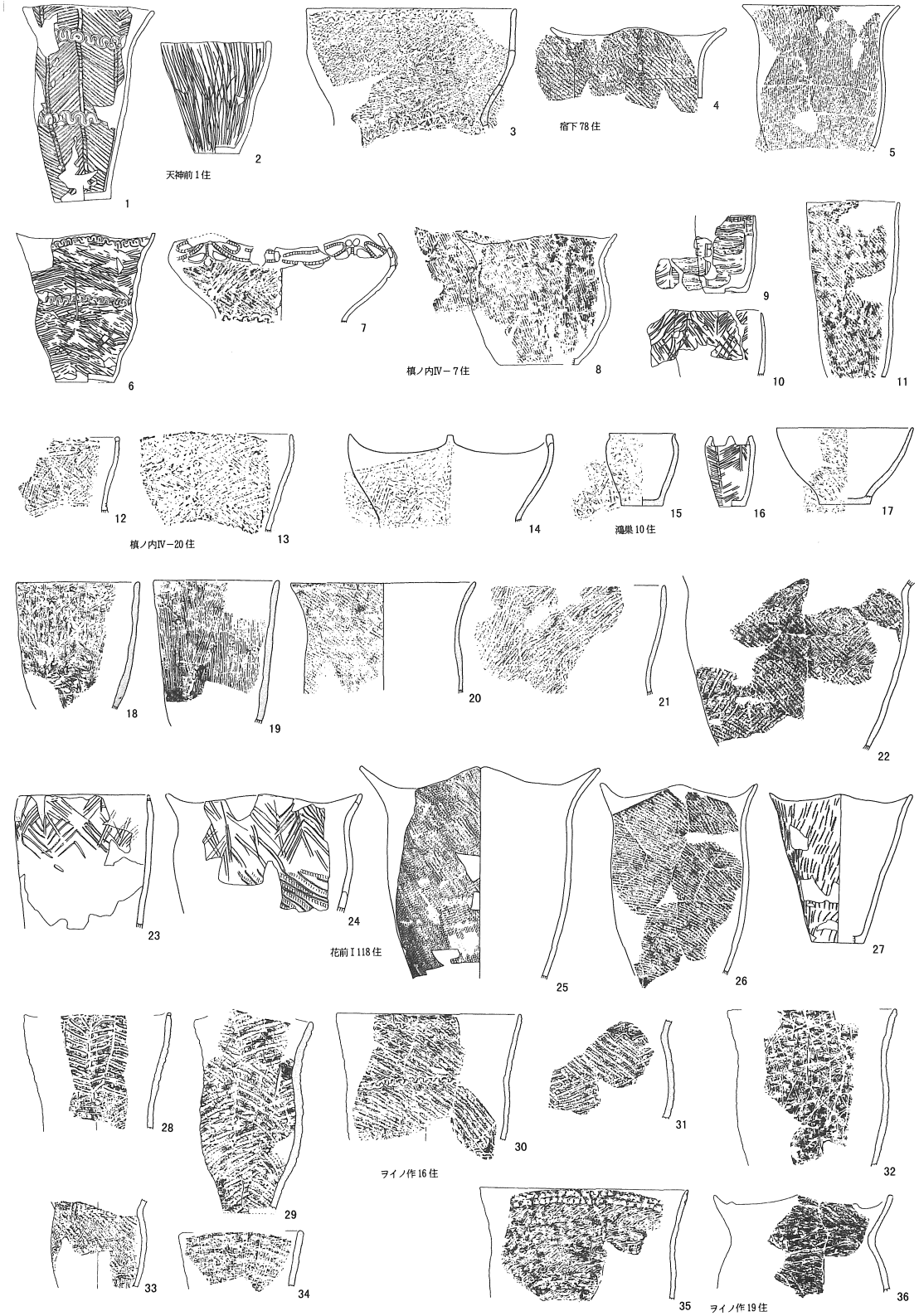
関東東部で出土する附加状施文の土器群が、組み合わせ鋸歯文との関係で捉えられる土器であることは既に触れたところである。口頸部・胴部がすべて附加状縄文で施文され、一見すると工具による施文のようにも見える。縦・横に器面を区画する手法が欠落している点は縄文による施文手法に共通した点である。縄文地上に竹管文によって施文された組み合わせ鋸歯文の土器に対して、附加条縄文を用いて施文することによって、視覚的に相似の土器を作り出していると考えられ、これが関東東部で主流となっていた。

この種の文様施文法を用いた土器は、関東東部から関東西部の、いわゆる奥東京湾沿岸地帯に濃密な分布が認められる。七社神社Ⅱ遺跡（川田　1998）27号土壙（第2図27～28）、志村遺跡第6地点（谷口　1995）21号住居跡（第2図29～33）、山崎貝塚（黒坂1989）（第3図21）をはじめ、天神前遺跡5号・18号住居跡、本郷貝塚第2地点4号住居跡（奥野・小宮　1999）出土土器（第3図22～24）、さらには飯塚貝塚024号（第3図26）・025号（第3図28～29）・026号（第3図31）、槙ノ内遺跡Ⅳ－7号（第4図6～7）、ヲイノ作遺跡（玉井　2000）16号住居跡例（第4図30）のような土器群は、奥東京湾沿岸地帯に見られるこの時期の典型例であるとともに、工具施文と附加条縄文との関係を端的に示しているものといえよう（註5）。また、鴻巣遺跡（古内　1974）10号住居跡からは小形の組み合わせ鋸歯文土器（第4図15）とともに、肋骨文と組み合わせ鋸歯文とが合体した土器（第4図14）が出土している点が注目される。

七社神社Ⅱ遺跡27号土壙例、志村遺跡第6地点21号住居跡例は極めて興味深い特徴をもっている。胴部と口頸部境に工具文で区画される点は他の附加条縄文土器と共通するが、口頸部に指頭ないしは竹管状工具による、推定8単位の円形押圧や刺突が施されており、工具施文による組み合わせ鋸歯文土器からの影響を彷彿させるものである。槙の内遺跡Ⅳ－20号住居跡出土土器（第4図12～13）も、格子目文・肋骨文・附加状縄文による菱形施文の土器などであり、同じような土器組成を持っている7号住居跡と比較すると、やや古い組成を示すとも見える土器群である。このなかで附加条



第3図　組み合わせ鋸歯文古段階の土器群(2)



第4図　組み合わせ鋸歯文古段階の土器群(3)

縄文により菱形施文される土器には、口唇部を廻るコンパス文と附加状縄文の施文の接点に円形刺突文を持つ破片がある。また、口唇部と口頸部とに平行地線による区画をもつ土器は、地文が附加状縄文による菱形施文で、組み合わせ鋸歯文古段階の特徴的な器形と施文形態といえる。一方、同遺跡Ⅳ－７号住居跡出土土器は20号住居跡とは若干組成を異にし、本郷貝塚出土の口唇竹管文、口頸部附加縄文施文の組み合わせ鋸歯文古段階類似土器と共に、無繊維で胴中位が屈曲し、口端が外反する土器がある。報告では前者も無繊維土器とされているが、後者は緩い波状口縁で、波頂下から円形刺突文が垂下する。恐らく円形刺突が施文される土器は、肋骨文の縦構成の置き換えとして施文されるのであろうが、この種の土器は地文のみが施文され、竹管による肋骨文が施文されないことを最大の特徴としている。また、胴部・口頸部境と口唇部にコンパス文が施文され、口頸部が外反する特徴的な深鉢があるが、組み合わせ鋸歯文古段階の土器に内湾傾向が強い点、むしろ古い様相をも感じさせる土器である。この他には肋骨文と格子目文が合体した追加成形施文法が明瞭な土器、口唇に竹管文施文される横施文のいわゆる肋骨文土器、縄文施文の円筒形土器などがある。

以上の土器組成と中台貝塚（堀越　1988）１号住居跡出土土器群を比較すると、全体の様相は明らかに古相をもっており、これは換言すれば天神前遺跡５号、18号住居跡、宿下遺跡18地点78号住居跡、本郷貝塚第２地点４号住居跡と江ヶ崎貝塚（野中　1983）１号住居跡との差異を問うこととも言い換えられる。この間の差異は極めて微妙で揺れを感じさせるが、組み合わせ鋸歯文古段階の土器群として位置付けておく。このようにみると、稲荷丸北遺跡（羽生　1983）１号住居跡、山崎貝塚４号住居跡等も塚屋10号住居跡に先行する土器群と位置付けられるであろう。

この他にも復山谷遺跡003号住居跡（清藤　1978）、鴻巣遺跡６号住居跡などのように、格子目文・肋骨文など、旧来からの土器に加えて組み合わせ鋸歯文古段階の土器を組成の一角として保有する遺構がかなり存在するようであり、飯塚貝塚024号住居跡と008号住居跡（第３図26～27）では、同一段階でありながらも土器組成が異なっており、関東東部にあっても系統が交錯していることを感じさせる部分である。

この段階の組み合わせ鋸歯文土器および附加条施文土器には、口唇部文様帯をもつ例が多い。多くは２～３条の爪形文列が口唇部をめぐり、波頂部には貫通孔・円形（指頭）押圧，或いはＸ状の沈線文が配置される。口唇部文様帯については、前章で触れたとおり系統的にたどることが出来る部分である。「X」状の意匠は、前段階の土器を見ると、植房貝塚例のように上下対向の鋸歯紋として描出される傾向が強いようである（注６）。またこれとは異なり、口唇部や胴くびれ部にコンパス文が施文される土器が依然として関東東部に存在することは、天神前遺跡18号住居跡や本郷貝塚出土の肋骨文系土器などからも明らかで、この点は関東東部の特徴とも言えるものである。
今まで見てきたように、工具施文による組み合わせ鋸歯文と附加条縄文による菱形施文の土器群とは、描出手法に地域的差異を有しながらも、系統的には相互に重なる部分が多く、いわば相互依存的な関係にあることが明らかとなった。この土器はその後どのように変化するのであろうか。

３）組み合わせ鋸歯文新段階の土器

前節において組み合わせ鋸歯文古段階の土器様相について簡単に触れた。ここで明らかとなった

のは本質的に内在する装飾手法の差異によって顕現した土器様相の違いであった。それでは組み合わせ鋸歯文が変遷する過程でこの様相はどのように変化してゆくものなのであろうか。ここには型式学上の黒浜式から諸磯式への変遷の問題が横たわっており、この周辺を捉え返す作業が、この間の状況を考える重要な鍵を握っていると私考する。

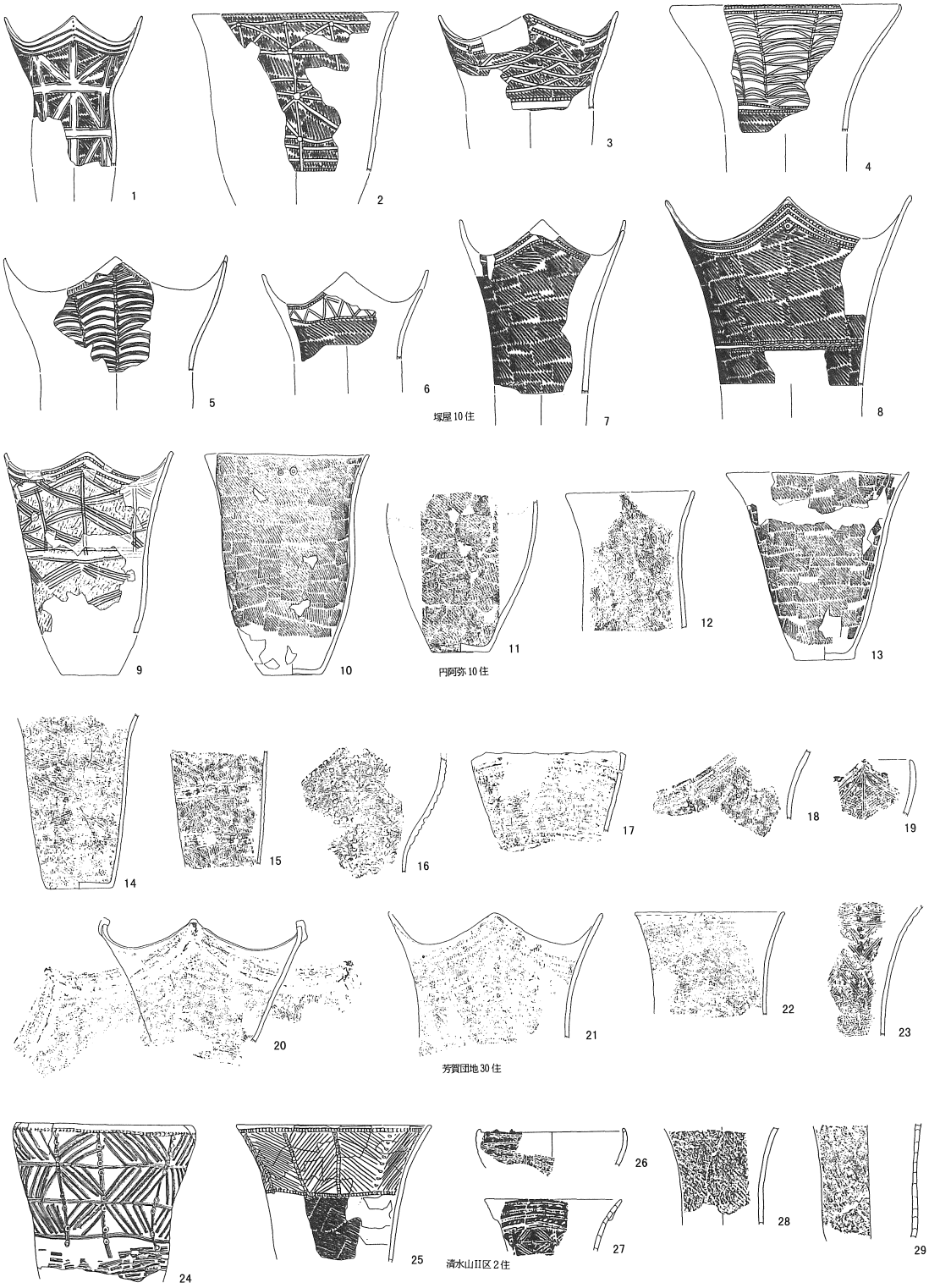
組み合わせ鋸歯文の変遷については、横帯に従属した縦構成から縦構成に従属した横帯へとの変遷が存在することは既に指摘したところである。いわば組み合わせ鋸歯文から米字文への変遷と言い換えたほうが判りやすいであろう。但しこれはあくまでもその一例であり、すべてが上記の如く変遷する訳ではなく、実際には判断に苦慮する事例も多々存在する。ひとまずその土器群について簡単に触れておこう。

この段階の組み合わせ鋸歯文土器には、器形・文様構成等において前段階に比較すると様々なバリエーションが認められるとはいえ、基本的には器面全面に施文されるものと、胴上半部あるいは口頸部に施文されるものとの大きく２つの種類に区分できる。このうち口頸部にのみ組み合わせ鋸歯文が施文される土器については、恐らくこの段階に生成されたタイプで、口頸部が外反する諸磯a式の基本とされる器形・文様帯構成を有していることは注目すべきであろう。

先ず全面展開の土器群について検討してみよう。江ヶ崎貝塚１号住居跡から出土した組み合わせ鋸歯文土器（第６図６～７）には、波状口縁と平縁の２者がある。平縁の土器は横帯間が磨り消され不鮮明な部分があるとはいえ、地文→器面貫通の縦区画線→横帯区画線→横帯間磨り消し→斜位沈線→円形刺突の順に施文されている。組み合わせ鋸歯文古段階の土器では縦位区画線が横帯区画線に先行して描出されることが通常で、縦区画線はあくまでも横帯構成に依存する存在であって、器面全体の縦位等分割を意図したものではない。また古段階の土器では、通常横・縦区画線の接点に刺突が施されることが多いが、新しい部分では斜位沈線との接点にも密に刺突が施される傾向が強いようである。

先に事例として取り上げた芳賀団地遺跡30号住居跡出土の組み合わせ鋸歯文も、器面を貫通する縦位沈線が文様構成の骨格をなす部分となっており、横位沈線は従属的な存在といえる。一方、工具施文による組み合わせ鋸歯文を除く他の土器群－例えば肋骨文土器や附加条縄文による菱形文土器－などは、基本的に横帯に依存する傾向はその成立当初から極めて希薄であり、特に肋骨文土器は前段階から既に縦位器面貫通の意識を強く持った土器であった。組み合わせ鋸歯文土器が縦区画を優先するとともに、これが組成として参入する背景には、主に関東東部地域との緊密な交渉関係を想定せざるを得ないであろう。

このように横帯内の縦区画を契機とした組み合わせ鋸歯文土器は、急速に器面全面の縦区画を意図するようになる。その反面主に関東東部以東では、肋骨文に象徴的なように、追加成形施文法による器面分割を意図する土器群、及び組み合わせ鋸歯文と同様の効果を附加状縄文によって施文する土器群とが支配的で、この土器は基本的に縦構成の要素が極めて乏しい傾向にある。いわゆる諸磯式の幅広い口頸部の土器は、器形は無繊維土器、文様帯は組み合わせ鋸歯文や縄文施文の土器からの相互の要素を受容することによって成立しており、この際に組み合わせ鋸歯文以上に肋骨文の構成が転写されることによって、諸磯的な肋骨文が成立したのであろう。これを契機として、土器



第5図　組み合わせ鋸歯文新段階の土器群(1)

は口頸部が重視されると共に、組み合わせ鋸歯文との干渉によって、縦位を基調とした様々な文様構成が生み出されるのであろう。中台貝塚１号住居跡出土土器（第６図34）は、口頸部を縦走する８単位の区画線と、横走する区画線が存在することから、組み合わせ鋸歯文の構成であることが明らかであるが、沈線が弧状に描かれる点では木の葉文とも言える文様形態である。木の葉文土器は肋骨文土器と同じく、８単位に限定されない多単位の縦区画を持っている反面、本質的には横区画の要素は存在しない。広い意味での木の葉文土器には、米島貝塚６号住居跡例（第６図18）の横区画線を持たずに対弧状に描かれるものと、塚屋遺跡10号住居跡例（第５図４）や芳賀団地遺跡30号住居跡例（第５図16）のように、横区画線に依存して、一端が弧線となるものの差異があることから、後者は肋骨文と米字文との相互交渉によって生み出されたもの（註７）と考えられる。

江ヶ崎貝塚１号住居跡、芳賀団地遺跡30号住居跡例では地文が前段階に比較し概して撚りが強い単節斜縄文で、１段３条の原体が多用されることや、胎土に繊維を含まなくなること、対弧状の肋骨文や木の葉文などこの段階に生成された諸磯ａ式古段階の土器が伴っていることから、一括資料と見なして差し支えないであろう。また、上述した状況はこの段階に普遍的に認められる現象である。

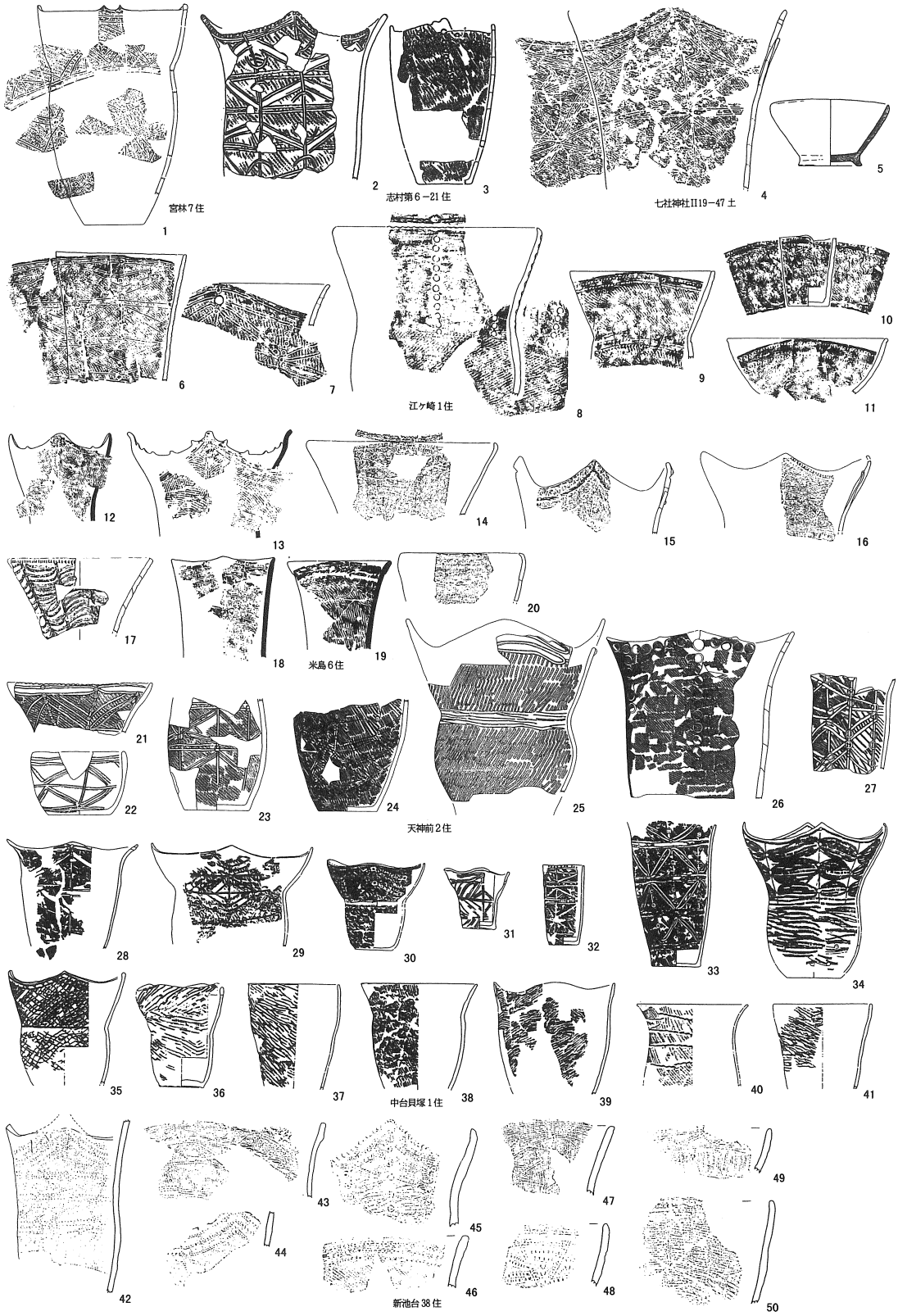
宮林遺跡（宮井1985）７号住居跡（第６図１）、志村遺跡第６地点21号住居跡（第６図２～３）、七社神社Ⅱ遺跡47号土壙（第６図４～５）は、有文土器が少ないことや、明らかに前段階の土器と混在していることなど、土器組成や一括性に問題はあるものの、抽出した資料はこの段階の典型的な組み合わせ鋸歯文土器といえる。

田中和之氏は、組み合わせ鋸歯文の検討を行い、爪形文から沈線文へ、附加条縄文による羽状縄文から単節斜縄文へ、文様描出の最終工程としての斜位沈線の施文を新しい段階の特徴と指摘した。筆者は以上に加えて土器の基本となる分割構成の変容を重視し、器面貫通の縦区画線を第一義とした土器の出現を新段階の特徴と捉えている。

全面展開の組み合わせ鋸歯文土器は縦区画線が単沈線であるため、磨り消しは横帯間や斜位沈線間に限定されているが、区画線すべてを平行沈線で描出し、かつ沈線間を磨り消すことによって、縄文施文部位が単位文として表現された土器が存在する。塚屋遺跡10号住居跡、米島貝塚６号住居跡は基本図形は米字文そのものであるが、沈線間がすべて磨り消され、縄文施文部位が三角の単位文となっており、あたかも図と地の関係を示しているように見える。

円阿弥遺跡（金子　1991）19号住居跡出土土器（第５図９）は口頸部内に横帯区画をもたず、菱形のモチーフが描かれたもので、志村遺跡第６地点21号住居跡例や七社神社Ⅱ遺跡47号土壙例と比較すると、斜位平行沈線間に磨り消しが施されることによって、より菱形が強調された文様となっている。このような磨り消し単位文の出現が、この段階に出現する木の葉文と融合し、入り組み木の葉文とその反転図形を生み出し、やがては文様図形の中心として定着してゆくものと考えられることから、この土器の出現は次段階以降の母体として評価すべきであろう。この点は次章で再度触れることとなろう。

以上の土器群は主に関東西部から北関東および東部奥東京湾一帯に展開する土器群であり、これらの土器群を通常諸磯ａ式古段階と認識している点は、研究史上のバンシン台貝塚出土土器の評価



第6図　組み合わせ鋸歯文新段階の土器群(2)

に帰結する問題である（註２）。

本郷タイプの土器は天神前遺跡で纏まって出土しており、新旧の様相を持っていることが明らかである。この中で、天神前遺跡５号・18号住居跡と２号住居跡出土土器を比較すると、土器組成に大きな変化が認められる。２号住居跡では、器面貫通の組み合わせ鋸歯文新段階の深鉢、同段階の浅鉢、口頸部コンパス文区画で、素文地上に肋骨文風な沈線が施文された土器、口唇直下に円形刺突列をもつ土器などがあり、波状口縁は尖頭化している。この住居からは、江ヶ崎貝塚１号住居跡と同様の粗製土器も含まれていることからも、いわゆる諸磯ａ式古段階に相当するものと言えよう。

新池台遺跡（和田　1983）38号住居跡には縦位を意図しない土器が存在する。附加状施文に系統をもつものであろうが、横多帯構成内に施文された連続鋸歯文には、鋸歯の頂部が同一方向菱形で菱形を意図しないものもある。この段階の特徴の一つでもある平行線と鋸歯状文との多帯構成とも関連すると考えられ興味深い。また、縦を意図しない土器群は、次段階では土器組成の中心的役割を担うものであることに注目しておきたい（註10）。

ここでは組み合わせ鋸歯文の変遷を軸に、土器に見られる類似性と共時関係を眺める視点で分析を行った。依存する部分の多寡によって、変化の度合いが異なっており、それらが前後関係を有するかの如き視覚的な錯覚にもとらわれるため、細分は難しい。諸磯ａ式古段階の土器群も関東東部との関係でみれば、前段階の差異性の延長線上に生起したものであることがわかる。いわゆる水子式は黒浜式と諸磯ａ式との共時関係を示す段階として議論されてきた経緯があるが、以上の検討をみれば、この議論は土器群総体の認識と、研究史上の定義との齟齬に根ざした部分として至極当然のことと理解されるであろう。

黒浜式から諸磯ａ式古段階にかけての土器群を以上の観点で眺めると、組み合わせ鋸歯文の成立に大きな画期があり、関東東西地域との相互依存の関係を保ちつつ、この延長状に諸磯ａ式古段階が成立した状況が把握された。言いかえれば、組み合わせ鋸歯文古段階は諸磯ａ式の骨格を形成した土器であり、要素を全て含んでいるとみなされる。研究史上の論議とは別に、諸磯ａ式の出発点と評価しても良いであろう。両段階の差異は連続的かつ極めて急激であったと言わざるを得ない。実際、個体を検討すると明瞭な差を見出し得ず揺れを観ずることもしばしばである。したがって、土器変革史の観点から見れば、組み合わせ鋸歯文段階は広義水子段階とも捉えられ、新段階が諸磯ａ式古段階とみなすことができるであろう。

それでは、この段階で提示された以上の関係は、爾後どのように変化するのであろうか。

３．単位文段階の土器群

前章において、組み合わせ鋸歯文土器を基準とした土器変遷を考察し、磨り消しを持つ組み合わせ鋸歯文土器の出現が、爾後の土器変遷の鍵を握っていることについて触れた。冒頭で示した磨り消し単位文土器とは、主に木の葉状入り組み文の土器を指している。この土器が出現する背景は、肋骨文土器・木の葉文土器などの縦区画文土器と、縦区画構成を基本としながらも、磨り消しが施されることによって単位文としての装飾効果を顕現した土器群との相互干渉によって生み出された土器群である。

組み合わせ鋸歯文新段階では、諸磯a式古段階の土器組成に代表されるように、縦区画を基本として、区画間を横位に充填して行くモチーフ構成が出現している。これらの構成には、直線基調のものや弧線を基調としたもの、単方向あるいは対に描かれることによって、肋骨文・三角文・木の葉文など幾つかのバリエーションが生じているが、基本的には縦を基調とした文様構成に拘束されていることは言うまでもない。一方では、組み合わせ鋸歯文新段階にも縦構成を意図しない土器群が存在しており、後続する磨り消し懸垂文段階でも両者が共存関係にあるとはいえ、施文構造は急速に横帯構成へと傾斜しており、縦構成は肋骨文土器に限定される傾向が顕著となってくる。

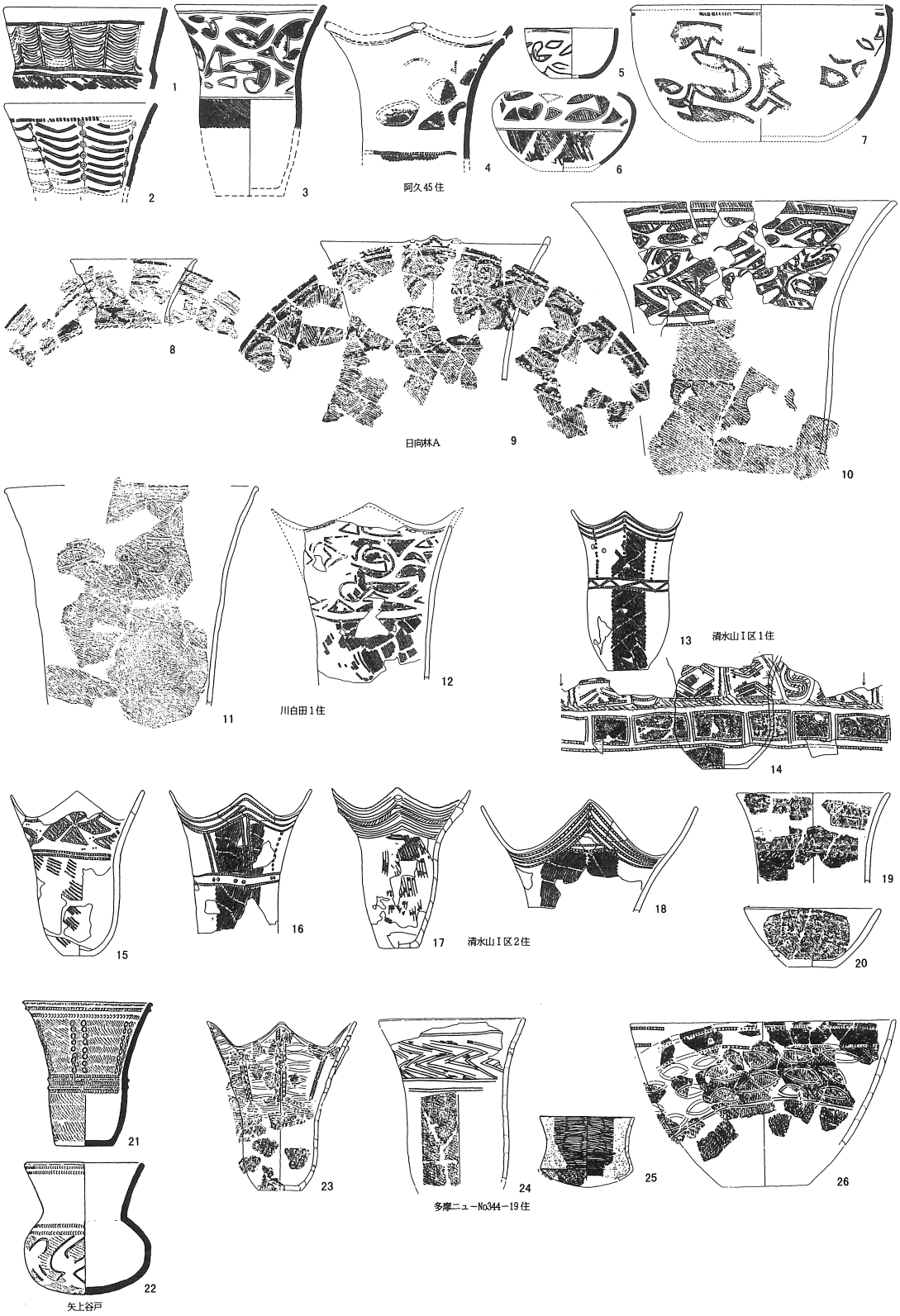
磨り消し懸垂文段階はおおよそ2段階に区分することができる。以下で新旧の様相について触れてゆくことにしたい。

1）単位文古段階の土器群

前段階で指標の一つになった器面全面を縦区画する土器群は急速に衰退し、肋骨文土器が縦区画の極めて保守的な土器群として残存する反面、縦区画の要素のみを器面分割の要諦とするものや、縦区画で分割された空間部に、木の葉状入り組み文が施文される土器が現れる。肋骨文土器は例えば峰岸北遺跡（田中　1998）10号住居跡出土土器（第8図20）のように、縦区画が多単位構成される傾向が顕著なことは旧来からの伝統であるが、縦区画の土器群に関しては波状口縁が主体であること、波頂部・波底部への8単位区画を厳守している点などは、口頸部に施文される米字文土器の基本構造に、木の葉文と磨り消し単位文の要素が融合した多系統性をもった土器と考えるべきであろう。

このように、木の葉状入り組み文の土器は、幅狭い縦区画線間に対弧状に施文された木の葉文からの変遷を辿ることができる。これが単位文化し、木の葉状入り組み文化する背景には、磨り消し手法によって図と地との関係が明確化し、単位文として表現されるに至った米字文土器の介在が強いようである。このような単位文化は、器面構成は縦構成を意図するとはいえ、縄文施文部をみれば縦構成を否定するような構成をも意味していることから、このような文様構成からの強い影響を抜きに考えることはできない。七社神社Ⅱ遺跡第10地点9号土壙出土の鉢型土器（第8図14）と、多摩ニュータウンNo457遺跡（川島　1996）出土の深鉢形土器（第8図18）、宇津木台遺跡（中西　1983）1号土壙の鉢形土器（台8図13）の口頸部文様を比較すると、この間の状況が理解しやすいであろう。

七社神社遺跡例は、口頸部に三角形の単位文が上下対に描かれ、図形外の地文は磨り消されている。地と図との関係をみると、塚屋遺跡10号住居跡や米島貝塚出土の磨り消しによって単位文化した米字文の構成に酷似していることがわかる。塚屋例や米島例では、縄文施文部位が単位文化しているとはいえ、あくまでも器面の区各線を重視しているが、七社神社例では、施文当初から単位文としての縄文施文部の図形を意図していることが大きな相違点と考えられる。七社神社Ⅱ遺跡例は、単位文化に縦の要素をも残したような構成を持っているが、このタイプの土器は単位文の主流とはなり得ず、三角あるいは菱形の七社神社Ⅱ遺跡例と良く似た文様をもつ清水山遺跡（原　1985）Ⅰ区2号住居跡出土土器のように、むしろ縦の要素を排除する様相が極めて強い。



第7図　単位文古段階の土器群(1)

多摩ニュータウン例や宇津木台例は上下対向の三角文間に木の葉文が施文されているとはいえ、単位文の図形を優先する文様構成においては七社神社Ⅱ遺跡例と同一次元で語れるものである。

このように基本構成において前段階からの濃密な系統を辿れるとは言え、この段階で単位文という文様構造に大きく変化した土器は、縦構成を排除する方向へと、土器の基本的組成を大きく変化させており、特に口頸部文様帯が比較的幅広く取られるものや、8単位の縦区画を有する土器など、組み合わせ鋸歯文の要素を色濃く残す土器群については、木の葉状入り組み文を多段化することによって、口頸部への施文を合理化するような土器が顕在化する。

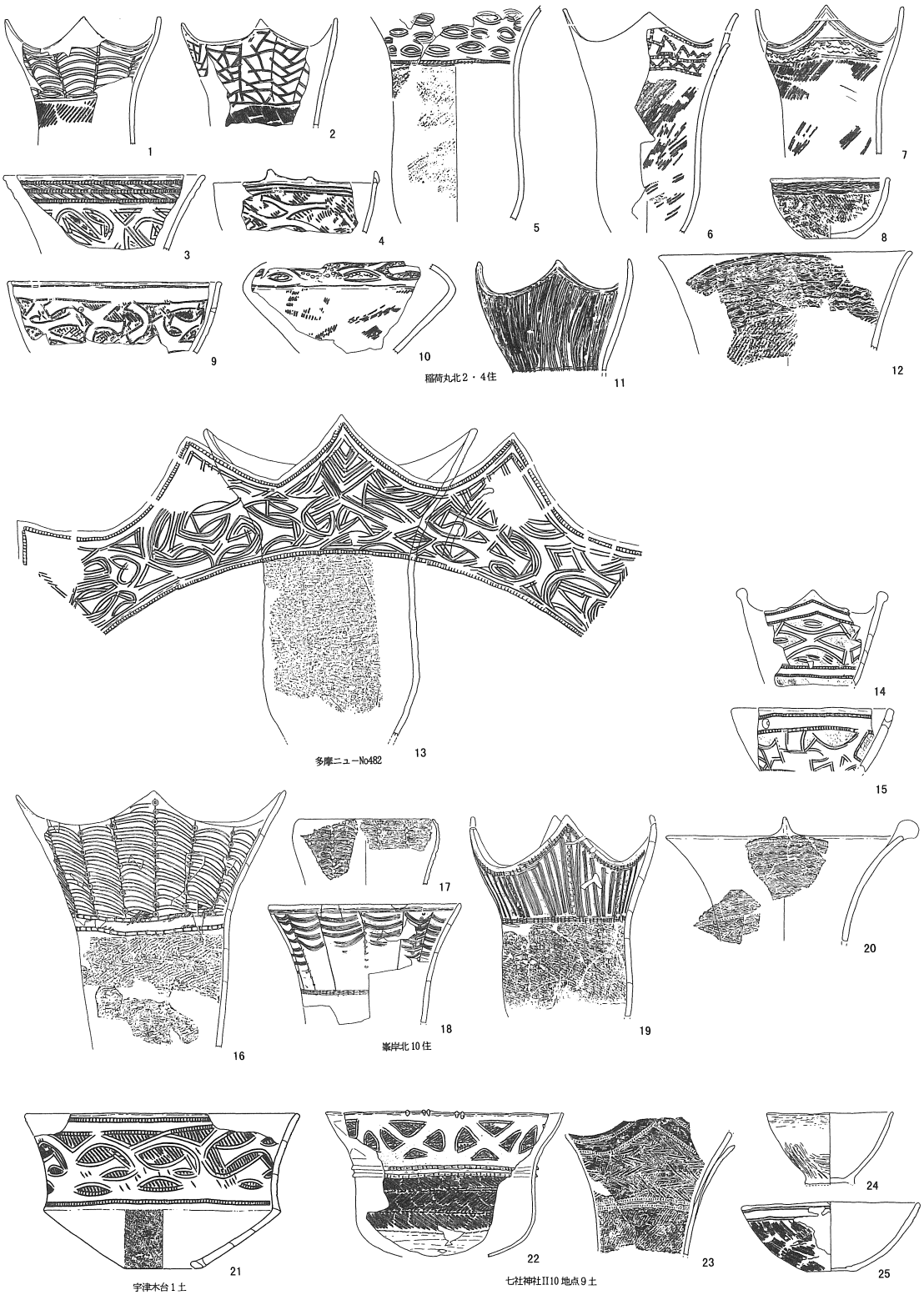
磨り消し単位文の主流となった木の葉状入り組み文は、口頸部の上下区画線にモチーフを連結することなく描かれることによって、単位文としての性格を遵守する土器群が一方の主役となっている。このような土器においては、木の葉状入り組み文間の施文に生じた空白部を三角のモチーフを対に施文することにより、図形的には地の部分が鋸歯文となるような文様構成を強く意図している。多摩ニュータウンNo457遺跡出土の4単位波状口縁に描かれた口頸部文様、あるいは村山遺跡住居跡出土土器は象徴的である。

このような構成法も、もとを辿れば縦を意図しない横帯構成の土器群に収斂するのであろうが、この間の系譜を一系的に辿ることは難しい。ともあれ、この土器群が次段階以降の基本的図形として定着していることは重視すべき事柄であろう。

日向林A遺跡（土屋　2000）（第7図7～9）、川白田遺跡（大賀　1998）1号住居跡（第7図10～11）、峯岸北遺跡10号住居跡（第8図14～15）からは、一見すると図と地との境界が極めて不明瞭となっている土器が出土している。単位文の一端が口唇部無文帯を区画する沈線に接して描かれているために、木の葉状入り組み文が重層化しているようにもみえるものである。このような描出法で施文された土器群と、掛貝塚（田中　1999）3号住居跡や村山遺跡住居跡出土の2単位波状口縁土器の口頸部文様とが、対照的な文様構成である点には、極めて興味深いものがある。

先に組み合わせ鋸歯文系統の縦区画要素のみが描出される土器群についてふれた。研究史上では、諸磯a式の標識資料として扱われている矢上谷戸遺跡出土土器には、口唇部無文帯に接して垂下する2列の円形刺突文をもつものが著名である。この他に清水山遺跡Ⅰ区1号・Ⅱ区2号住居跡、多摩ニュータウンNo344遺跡19号住居跡出土土器にも縦区画文が描かれる土器が出土している。

矢上谷戸例を除く他は4単位波状口縁で、区画間の施文例は多摩ニュウータウン遺跡例で木の葉文の施文例が知られている。清水山遺跡Ⅰ区1号住居跡から出土した埋甕（第7図13）には特異な土器がある。口唇部が欠落しているが、口頸部・胴部紋様帯区画および口頸部縦区画が隆帯によってなされており、口頸部縦区画間には対向する鋸歯文や菱形文が描かれていることや、平行線の意匠が見られることから、組み合わせ鋸歯文の系統を有しているものと推測されるとともに、縦区各間の図形は、単位文的な鋸歯構成に推移していることが伺えることから、組み合わせ鋸歯文が変容してゆく姿を反映したものと考えられる。もっとも、この段階に見られる磨り消し単位文は組み合わせ鋸歯文新段階の構成を遵守しており、三角・菱形・入り組み状木の葉文ともに、磨り消し手法による図と地との反転表現は明瞭で、磨り消しが省略され、地文上への沈線文によってのみ描出される土器群は新しい様相といえるであろう。



第8図　単位文古段階の土器群(2)

この段階には、掛貝塚例（第９図　６～７）、村山遺跡（大野　1960）出土例（第９図１～２）のような２単位波状口縁の土器が出現する。事例は極めて少数だが、酷似した資料として注目される。いずれも口頸部上下端区画線が隆帯によって描かれている点は、矢上谷戸（岡本　1965）出土例（第７図20）などとの共通性が濃厚である。掛貝塚３号住居跡から出土したもう１例の２単位波状口縁の土器は、口頸部の文様構成が異なり、縦区画を持たない土器である。

２単位大波状口縁の由来は明瞭ではない。波状部に関しては、４単位波状口縁との突起などを含めた形態的な類似性が強いものと、波状部が全体に丸みをもち突出も弱いものとがある。関山式から黒浜式の古い部分にも２単位大波状口縁土器が存在することから、潜在的に組成の一部であった可能性も考えられるが、直接的な系統変遷を伺うことは難しい。組み合わせ鋸歯文新段階と考える七社神社Ⅱ遺跡47号土壙からは緩い２単位波状の浅鉢形土器（第６図５）が出土しているが、この段階の浅鉢には２単位のものは見られず、口頸部の形態などは平縁深鉢と等しいものや、多摩ニュータウンNo457遺跡例のように口端が内折するものがあるなど、別の変化を辿るようである。しかし次段階にいたると、２単位大波状口縁と浅鉢との類似性が顕著となってくる。

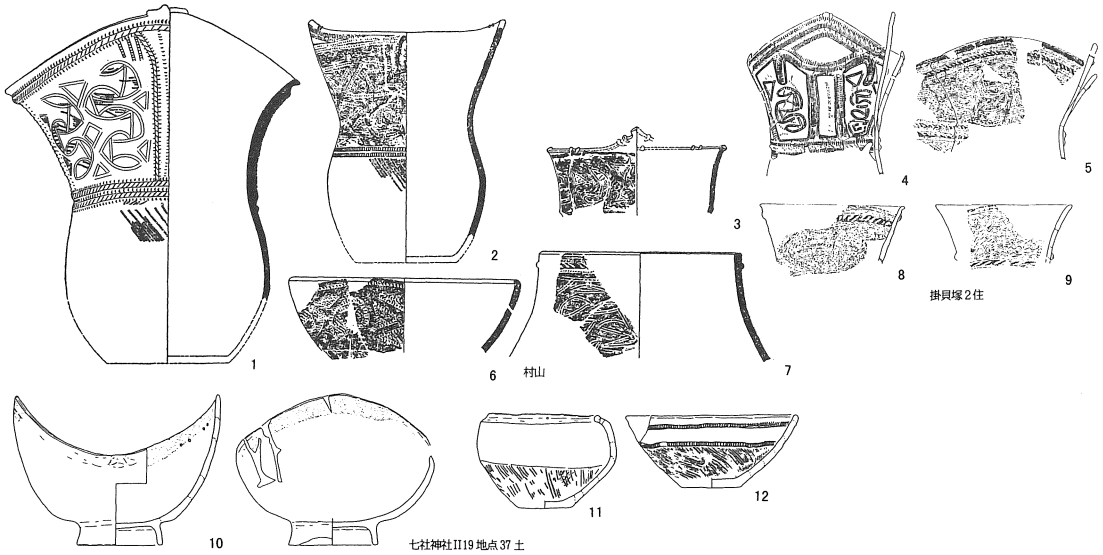
矢上谷戸例のように、口唇部・口頸部と胴部との区画に隆帯が多用される土器は、既に組み合わせ鋸歯文古段階の土器に存在し、大木2b式では通常口唇部区画に普遍的に認められ、口唇部に多数条の竹管文を用いたり、並行竹管文で口唇部を表現する諸磯式土器とは趣を異にしている。大木３式では刻みを有する隆帯による文様表現が認められるが、一般的に隆帯のみによって区画の意匠を表現する方向に向かい、沈線文施文の意図が極めて乏しい傾向がある。

このようにみると、諸磯式の一部にみられる隆帯による区画表現は、大木式とも無関係ではないと考えるべきであろう。またこのような表現手法が、次段階における、主に２単位大波状口縁土器における爪形文間の浮線表現の下地として機能していた可能性が極めて高いものと考えられ、地域をこえた連動関係を想定することができる部分である。

縦区画線が組み合わせ鋸歯文に由来し、この段階にも区画要素のみが一定量残存するとはいえ、主体は非縦区画文の土器に推移していることを示している。また、２単位大波状口縁の系統は次段階で盛行する下地となったとはいえ、縦区画構成の土器が急速に廃れてゆく点は、他のすべての土器にも当てはまることである。

以上のように、組み合わせ鋸歯文新段階に後続する土器群には、木の葉波状入り組み文が縦に連接するように描写された、前段階に見られた木の葉文の系統に近いもの、磨り消し組み合わせ鋸歯文に端を発し、図形そのものが単位文化すると共に、文様構成が横帯を志向し縦区画の要素を排除してゆくもの、縦区画線のみが描出されるもの、および肋骨文などの土器群で構成されている。木の葉状入り組み文の出現や単位文化はこの段階を特徴つける極めて大きな要素であり、縦区画の残存などに旧来の要素が残るとはいえ、むしろ次段階との連続性が極めて強い。従って、この段階と次段階を包括して、木の葉状入り組み文に代表される単位文段階として大きく概念化し、さらに２単位大波状口縁の出現と展開をもって新旧に区分した訳である。

磨り消し単位文古段階には阿久遺跡45号住居跡、稲荷丸北遺跡２・４号住居跡、峯岸北遺跡10号住居跡、清水山遺跡Ⅰ区２号・Ⅱ区１号住居跡、稲荷山遺跡15号住居跡等があり、関東東部では新



第９図　単位文古段階の土器群(3)

池台遺跡38号住居跡出土土器群を一括資料として提示できるであろう。

２）単位文新段階の土器

前節で組み合わせ鋸歯文新段階と単位文古段階との区分の意義について述べるとともに、磨り消し単位文と２単位大波状口縁の異同をもとにして、新旧に区分され得ることを述べた。

この間は型式学上では諸磯ａ式新段階と諸磯ｂ式古段階とに区分されているが、肋骨文や木の葉状入り組み文などの単位文古段階の土器群、および器形上で強固な特色を持つ２単位大波状口縁の土器をみても、図形上での変化は緩やかで極めて連続性が強い土器群である。したがって、概念的には一括りの単位で捉えることができる。しかし、装飾上の細部をみると、幅広の爪形文が多用されたり、磨り消し手法が省略される傾向が顕著となるなど、幾つかの変化を捉えることができる。またこの時期にも前段階と同様に住居跡一括の単位で捉えられる資料が多いことから、これを基準に比較検討し変化の方向性を考えてみよう。

矢頭遺跡（天野　1997）１号住居跡は関東西部のこの段階の代表的な組成を示しているが、基本的な土器組成は前段階とほとんど変化はない。木の葉状入り組み文や対弧状文様の土器を見ると、磨り消し手法が省略された個体がほとんどであるとともに、木の葉状入り組み文では、素文の口唇部帯を区画する沈線に接して文様が描かれる個体が多い。矢頭遺跡１号住居跡はほとんどが沈線施文の土器であり、２単位大波状口縁と考えられる土器についても、平行沈線で文様が描出されている。この地域では以降も沈線施文土器が主流となっており、系統的に関東東部との関係性が根強いことを物語っている。

塚屋遺跡15号土壙出土土器は、組成上からこの段階に属することは明らかである。全体に横構成文様へ傾斜する傾向が顕著とはいえ、縦区画の土器はこの段階でも一定程度存在していることを示

している。

２単位大波状口縁の土器はこの段階で急速に普及しており、４単位波状口縁と連動した尖頭状の波頂部が見られなくなる。縦区画を取るものは見られず、緩い弧状を呈するものと台状となる口頸部には、単位文としての木の葉状入り組み文は施文されなくなる。これは、前段階に出現した磨り消し単位文が鋸歯状となる文様構成と、木の葉状入り組み文が区画線に接して描かれることで視覚的に生じた図と地との反転関係をもつ図形の両系統が干渉した結果、一方では従来型の木の葉状入り組み文が区画線に癒着しながらも鋸歯状構成を描く方向に、一方では図と地との反転関係をもとに地の部分を閉塞し文様化する方向に進んでおり、後者は以降の諸磯式の基本的文様構成として定着するものである。２単位大波状口縁の土器は、専ら後者の文様構成に執着しており、この意味では先駆的な土器と言えるだろう。この段階で頂部が台状となるものが多いことは、基本的にこの文様構成が横帯構成と密接に関わっており、緩い波状となる土器には、波頂部下に対向する三角のモチーフが描かれることも、波状の形態を考慮した文様構成といえるのである。

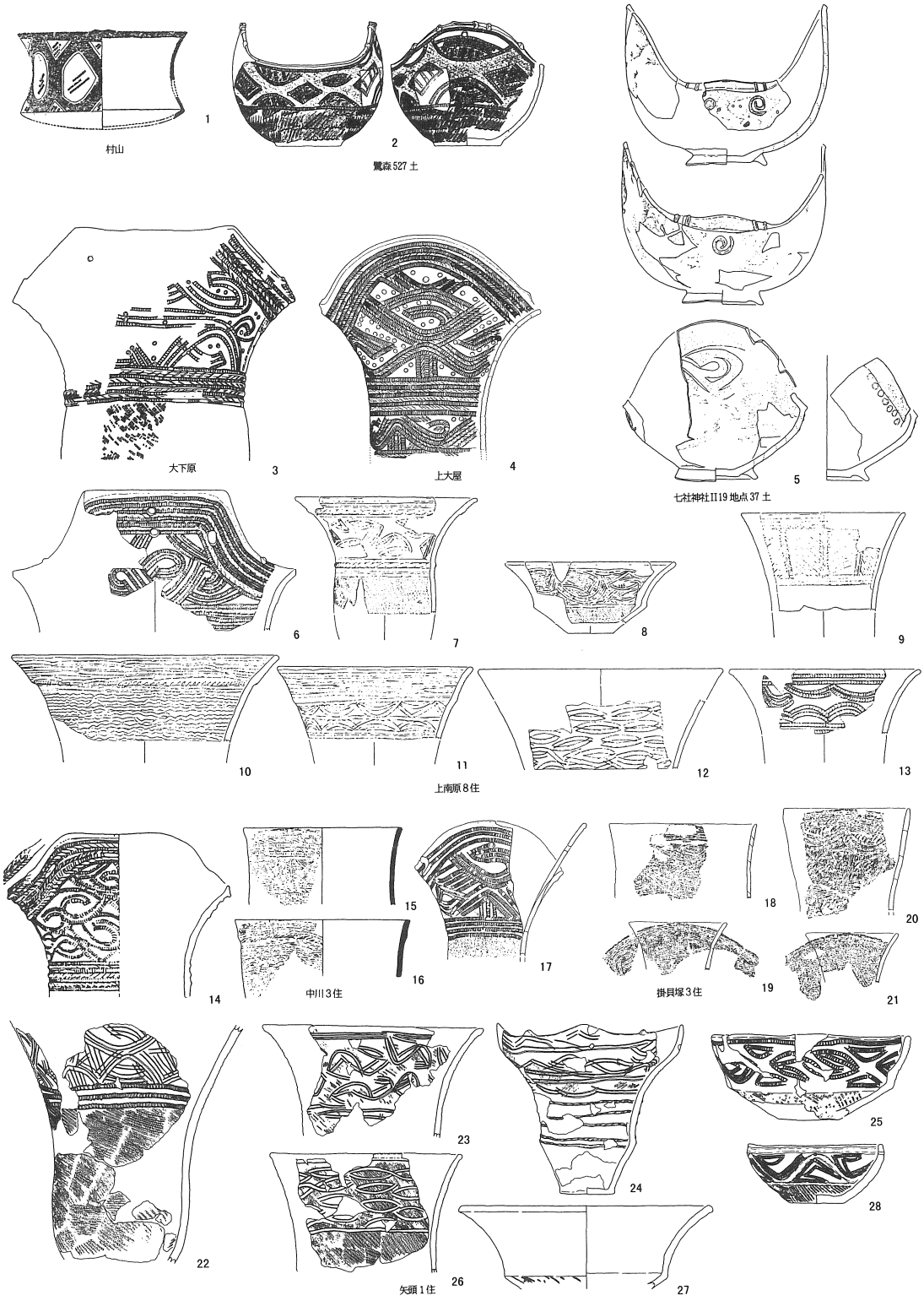
鉢形土器にも２単位波状口縁をもつものがある。例えば七社神社Ⅱ遺跡19地点36号土壙出土土器（第10図３）、鷺森遺跡527号土壙出土土器（第10図２）を典型例とする。前者は赤彩によって文様が描かれている。後者の図形描出はこの段階に特徴的といえる。この時期には鉢・浅鉢がともに器種組成上重要な位置を占めているが、多くは口頸部素文で、口端が内折したり、口頸部が外反するものが多い。口頸部文様に木の葉状入り組み文が好んで施文されることも特徴と言え、七社神社Ⅱ遺跡や鷺森遺跡例とは系譜が異なるようである。また、この土器に関しては、口頸部が内湾していることに注目しておきたい。

２単位大波状口縁の土器が、文様構成において先駆的存在であるとしたが、この他にも他とは異なった点がある。それは爪形文間に見られる浮線の存在である。この段階の浮線は、爪による文様描出によって生じた粘土の盛り上がりである場合も存在するが、明らかに浮線を貼付しているものが多いことから、偶然の産物とするには無理がある。

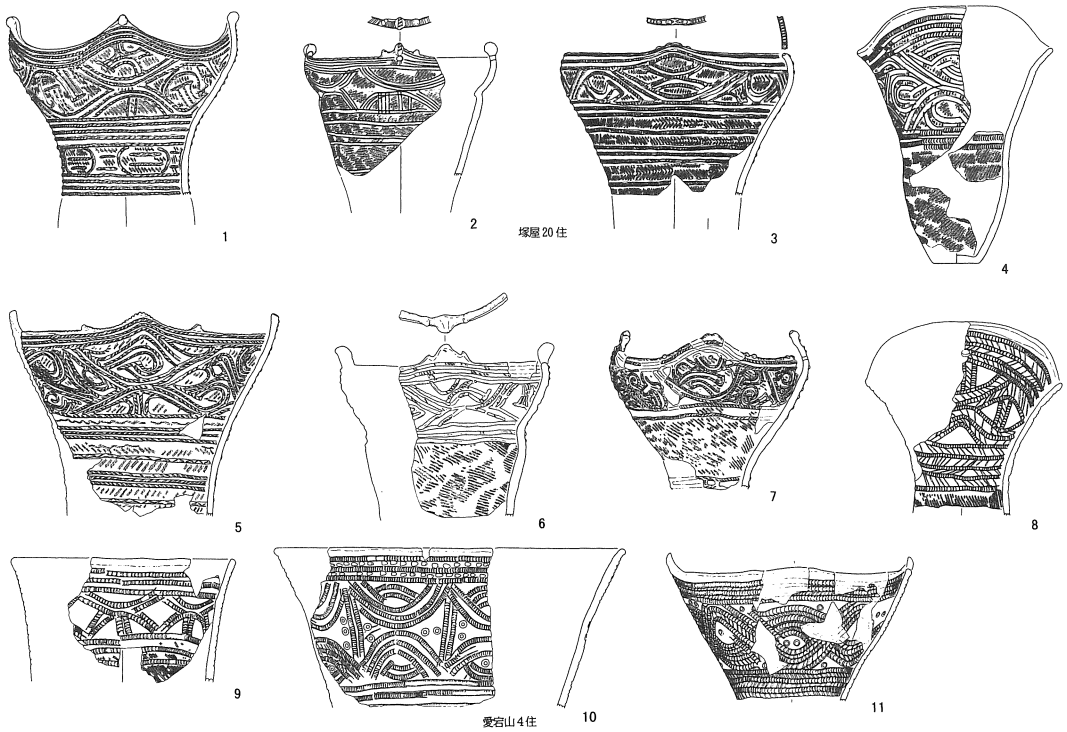
多摩ニュータウンNo205遺跡出土土器（谷口　1989）や、中川貝塚（大宮市　1961）３号住居跡出土土器（第10図14）をみると、爪形文間には明らかに浮線が伴っており、形態が口唇部・口頸部区画に並走する浮線と共通していることから、文様が区画線に接した結果として取りこまれたとする鈴木の見解（鈴木　1996）は正鵠を得たものといえる。

このようにみると、文様要素として木の葉状入り組み文や肋骨文を堅持する一方で、文様構成は組み合わせ鋸歯文の系譜を引き、磨り消し単位文古段階では、縦構成がその意味を失ったことから、土器文様は横方向へと意識が変わり、次第に主体的な構成として定着し、その過程で生み出された文様の反転が、次期へと繋がる基本的な文様を形成したのである。２単位大波状口縁土器には先駆的な変化がある。このタイプの土器は、土器組成・文様等において広域な共通性があり、あたかも土器文様の変化の方向性を先取りしている感がある。これを下地として浮線文が展開してゆくのであろう。

この段階をもって組み合わせ鋸歯文系統の土器は収束し、次期には浮線文の土器が急速に普及してくる。土器もキャリパー形が主流であることとも相俟って、諸磯内部では大きな画期といえるで



第10図　単位文新段階の土器群



第11図　浮線文と爪形文の土器

あろう。

この次期の特徴である浮線文の起源には、諸磯内部説と他系統説の２者が対峙的である。第11図に示したように、爪形文と浮線文の土器を比較すると、爪形文が浮線文に置き換わったことは明らかで、この点では北白川系の変化とも共通するものと考えられる。この変化には２単位大波状口縁の土器がその先駆的役割を果たしていた可能性が高いと考えられる。

４．おわりに

今まで述べてきた土器群の変化は、各段階の指標とすべき構造的特徴を概念的に捉えて設定したものである。もちろん土器には地域差や系統差が複雑に交錯しており、単純に一元化できるものではないことは筆者も充分に承知しているつもりであるが、従来の型式枠や細分の呼称を離れて改めて土器を眺め返してみると、地域的系統的に異なった背景を持ち文様描出手法を異にしながらも、それぞれを結びつける同一構造が存在することによって、相互の影響関係のもとに類似した文様を描く土器群が抽出できた。したがってこの纏まりを上記の概念で一括すると共に、前後を型式学上の画期として認定した訳である。この間にも時間の経過が存在したことは確実で、おおよそ新旧様相の細別は可能であり、これが、型式区分や細別の根拠として提示されていた部分でもある。しかしながら、この間の変遷には新旧の要素が混在していたり、遺構内出土資料においてもしばしば伴出関係が認められるなど連続性も強く、厳密な区分が行える訳ではないことから、相対的な変化と考えるべきなのであろう。研究上史の概念と本稿での段階設定との差異もこの部分に在る。従って、

ある系統が時間的変遷を伴って連続的変化を来たすというよりも、地域的、系統的に多様な関係性の様相のなかで生じた差異と評価しておきたい。更なる細別が可能か否かは、他地域・他型式との対応関係を念頭に進めるべき課題と私考する。

関東と東北の土器群とは不可分な関係にあることは確かであろう。関東との対応をみるならば、下ノ平D遺跡12号住居跡と宇輪台遺跡4・5号住居跡出土土器との内容差に示されるように、縦区画成立段階を境に大木2式にも変化が認められるようである。現状では相互の対応関係を明らかにすべき資料群にかけているが、宇輪台遺跡4・5号住居跡出土土器には、組み合わせ鋸歯文の古い部分に対比すべき土器が含まれている反面、7号住居跡には新しい部分に対比されるべき資料が多いようである。したがって、縦区画成立段階までを大木2a式と捉え、組み合わせ鋸歯文段階を大木2bとし、さらに新旧2段階に区分が可能ではないかと考えている（註11）。以降は単位文段階と大木3式、浮線文段階と大木4式、諸磯c式と大木5式、十三菩提式と大木6式との平行関係を想定している。

最後に、本稿を草するにあたり、金子直行、田中和之氏には、筆者のぶしつけな質問にも心よく応じていただいた。また文献収集や資料見学に際して下記の方々のご協力を得た。ここにご芳名を記し、感謝の意を表したい。天野賢一、奥野麦生、黒坂禎二、小宮雪晴、鈴木敏昭、鈴木徳雄、関根慎二、丹治清一郎、成田友紀子、原　充広、早川一朗、長谷川清一、堀江　格、堀越正行、松田光太郎、渡辺清志。

註

1・田中氏の言う「組み合わせ鋸歯文」は、該期の描出手法を象徴的に示していると考えられることから、本稿では田中氏に従いこの用語を用いた。研究史上の「米字文」とは相違するものではない。

2・天神前遺跡1号住居跡から出土した肋骨文土器は極めて興味深い資料である。追加成形施文法によって造られた土器で、接合以前に縦区画線と斜位沈線が描出された後に、接合部にコンパス文が施文されているようである。コンパス文は附加条施文土器の口唇部や括れ部に一般的に認められる伝統的な施文形態であるが、肋骨文では普遍的ではない。またこの土器は肋骨文が8単位に描かれていることも通常とは異なった点であり、組み合わせ鋸歯文の影響を彷彿させる土器といえる。

3・黒浜式中葉では附加条第1種原体が多いように思われるが、この原体は組み合わせ鋸歯文段階の東関東でもしばしば認められる反面、関東北部は単節縄文であることが多い。本文中でも触れたように、糸井宮前Ⅱ遺跡100号住居跡出土土器は、附加条第1種原体施文上に、東関東的附加縄文を工具によって置換した文様であると見るならば、新旧関係を示すとはいえないであろう。

4・実際には判断に苦慮する個体も多い。例えば居木橋遺跡2号住居跡出土土器、宮林遺跡（宮井　1995）7号住居跡出土土器（第2図31）などは残存部位も少なく判別し難いことから、伴出関係や次段階との土器様相の差から組み合わせ鋸歯文新段階と判断した。また、第2図22～26の阿久遺跡66号住居跡、飯山満東遺跡8号住居跡は、口唇部形態や共存資料から、同図28～32の志村第6遺跡21号住居跡出土例も、口唇部形態や鋸歯状施文の要素、伴出遺物から、組み合わせ鋸歯文新段階にまで下がる可能性も考えられる。

5・本郷貝塚第2地点4号住居跡例には、施文後に縦位のナゾリが施されている。またヲイノ作遺跡16号住居跡出

土の同種土器には、施文以前の縦位の沈線が認められる。このような関係は、例えば糸井宮前遺跡と長田B遺跡における器形との関係と、相対的には極めて近しい関係と考えられるもので、組み合わせ鋸歯文の縄文施文タイプとも言える土器群が主に関東東部に存在することを端的に示していることになろう。

6・花前Ⅰ遺跡118号住居跡は、追加成形施文法による肋骨文土器や沈線による菱形施文の土器と共に、無繊維縄文土器が出土しているが、組成上では組み合わせ鋸歯文古段階の範疇に留めておくべきであろう。一方、天神前遺跡26号住居跡には、明らかに古いと判断される土器と共に、諸磯a式の典型例や、中台貝塚に近似した土器なども含まれていることから、総じて組み合わせ鋸歯文新段階に位置するものが多いようである。但し縄文施文の粗製土器については、判断し難い部分も多い。

7・鈴木徳雄氏は塚屋遺跡10号住居跡出土土器（第5図3）を糸井宮前類型（本稿の組み合わせ鋸歯文土器）と肋骨文類型との相互交渉によって生み出されたものと定義した。筆者もこの見解に従っているが、木の葉土器の範囲をやや広く考えている。肋骨文にも弧状沈線で描かれるものがかなり多いようである。

8・バンシン台貝塚と共に下田町東遺跡出土土器も重要な問題を含んでいる。報告では含繊維の第一類・第三類が住居跡床面から貝層下部に、無繊維の第二類が貝層上部に多いとされている。第一・三類とバンシン台との差異は主是しえるが、第二類の組み合わせ鋸歯文土器は新旧の判別に苦慮する。稲荷丸北遺跡1号住居跡出土の組み合わせ鋸歯文を古段階の要素を含むことを重視し古く位置付ければ、バンシン台貝塚に先行する土器群として改めて評価しなおすことができる。但しこの部分は関東東部地域の土器群をも加味しなければならないため、組成や要素の差異を時期差に置き換える危険性をも孕んでいるものと私考する。

9・鈴木氏はこの間の変化を、単位文としての木の葉状入り組み文から、文様帯上下の区画描線に癒着した変形木の葉状入り組み文への変化（鈴木　1994）として捉えている。この間の土器文様を辿ると、単位文として独立して描かれ、地の部分が「X」状となる土器と、単位文同士の描線が連鎖し、図と地との関係が不明瞭になってくる土器とが並列している。このことから文様帯上下区画線への癒着は地の部分を重視した文様構成への変化を示すと共に、対弧線間の凡字状文様への文様の変化は木の葉状入り組み文からの変化という、2極の変化から成り立っているものと考えられる。したがって、鷺森遺跡527号土壙出土の鉢形土器（第9図15）と村山遺跡出土の鉢形土器（第9図6）とは同一原則で語られる土器であり、同図掲載の1～5、7～10との型式学上の差異が時間差を伴っていると考えられる。七社神社Ⅱ遺跡37号土壙から出土した一括資料（第9図11～14）には、2単位大波状の鉢形土器が含まれているが、伴出関係を見ると、同遺跡36号土壙出土土器に先行する所産と考えられる。

10・組み合わせ鋸歯文新段階には、櫛歯状工具を用いた平行線と鋸歯文の重畳施文の土器（第　図20）がしばしば認められる。この土器の系譜には不明瞭な点が多いが、仮に宇輪台遺跡4号住居跡出土のコンパス文土器を、伴出関係から組み合わせ鋸歯文古段階に存在するものと見れば、この土器も連続性が辿れることになる。関東東部では、この段階にも口唇部・口頸部と胴部との境にコンパス文が施文される個体が多いことから、施文要素の上では宇輪台遺跡とも共通性があると考えるべきであろう。

11・宇輪台遺跡では縄文地文の土器群が主体を占め、先行する下ノ平D遺跡12号住居跡出土土器群とは、地文の系統上でも不連続である。関東を瞥見すると、組み合わせ鋸歯文土器群には地文縄文と対応した土器が主体で、附加上縄文とは系統的にも対峙した関係にある。宇輪台遺跡では地文縄文の土器が主体で少量ながらも組み合わせ鋸歯文が出土していることなど、関東東部的な土器とはやや様相が異なることに注目しておきたい。

引用・参考文献

我孫子昭二1983『小山田遺跡群Ⅱ』小山田遺跡調査会

天野賢一1997「矢頭遺跡」神奈川考古学財団調査報告第26集　神奈川考古学財団

網谷克彦1989「北白川下層土器様式」『縄文土器大観』小学館

新井和之1979「黒浜式土器小考」『日本考古学研究所集報』Ⅱ

新井和之1979「黒浜式土器研究の問題点」『土曜考古』創刊号　土曜考古学研究会

新井和之1982「黒浜式土器」『縄文文化の研究』3雄山閣

新井和之1985「黒浜式土器研究の現状と課題」『土曜考古』第10号　土曜考古学研究会

市川　修1982「上南原」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第10集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

市川　修1983「塚屋・北塚屋」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第25集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

今村啓爾1981「施文順序から見た諸磯式の変遷」考古学研究27巻4号　考古学研究会

今村啓爾1982「諸磯式土器」『縄文文化の研究』3雄山閣

岩上照朗ほか1995「横倉宮ノ内遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告第161集　栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

植月　学1997「庚塚遺跡第5地点」市川市教育委員会

植月　学1998「東新山D遺跡」市川市教育委員会

江坂輝弥1939「神奈川県都築郡境田貝塚調査報告」考古学雑誌29巻7号

江坂輝弥1951「縄文式文化について（9）」『歴史評論』31

江坂輝弥1938「横浜市神奈川区下田町東三号貝塚における土器について」『考古学雑誌』28巻5号

大野政雄ほか1960『村山遺跡』斐太中央印刷株式会社

大宮市1961「中川貝塚」「下手遺跡」『大宮市史』　第1巻

岡本　勇1965「縄文文化の発展と地域性－関東」『日本の考古学』Ⅱ河出書房

奥田正彦ほか1989「関宿町飯塚貝塚」千葉県文化財センター調査報告第156集　千葉県文化財センター

奥野麦生1992「黒浜式における格子目文土器成立についての覚書」『埼玉考古』第29号　埼玉考古学会

奥野麦生小宮雪晴1999「本郷貝塚第2地点4号住居跡」「天神前遺跡55号土壙」『埼葛地区文化財担当者会報告書』第3集　埼葛地区文化財担当者会

小野正文1986「釈迦堂Ⅰ」山梨県埋蔵文化財センター調査報告17集　山梨県教育委員会

金山喜明ほか1987「千葉県野田市槙の内遺跡」遺跡調査報告第5冊　野田市遺跡調査会

金子直行1989「縄文前期中葉における大形菱形文系土器群の成立と展開『埼玉考古』第25号　埼玉考古学会

金子直行1991「竹之花・下大塚・円阿弥」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第105集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

川島雅人1996「多摩ニュータウン遺跡－No457遺跡－」東京都埋蔵文化財センター調査報告書第35集　東京都埋蔵文化財センター

川田　強1998『七社神社遺跡Ⅱ』東京都北区教育委員会

清藤一順1975『飯山満東遺跡』房総考古資料刊行会

清藤一順1978「復山谷遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』千葉県都市公社

黒坂禎二1989「羽状縄文系土器の文様構成－１」『研究紀要』６　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

黒坂禎二1989「羽状縄文系土器様式」『縄文土器大観』小学館

黒坂禎二1993「羽状縄文系土器の文様構成－２」『研究紀要』10　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

古内　茂1974『柏市鴻巣遺跡』千葉県都市公社

甲野　勇1924「武蔵国橘樹郡生見尾村貝塚発掘報告」『人類学雑誌』39巻４・５・６号

甲野　勇1935「関東地方に於ける縄紋式石器時代文化の変遷」『史前学雑誌』第七巻第三号

小坂井孝修ほか1998「多摩ニュータウン遺跡－No344遺跡－」

小林達雄ほか1965「米島貝塚」庄和町文化財調査報告第１集　庄和町教育委員会

小宮雪晴1995「宿下遺跡－第18調査地点－」蓮田市文化財調査報告書第25集　蓮田市教育委員会

小宮雪晴1996「黒浜式土器の構成と展開に関する一考察『埼葛地域文化の研究』下津弘君・塚越哲也君追悼論文集刊行委員会

桜井二郎1981「大生郷遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告ＸⅡ』茨城県教育財団

笹森憲一1987『鷺森遺跡の調査』郷土資料第33集　上福岡市教育委員会

笹沢　浩ほか1983　「阿久遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－原村その５』長野県教育委員会

佐藤典邦1989「大木２ａ式土器研究ノート」『史峰』第14号新進考古学同人会

庄野靖寿1984『尾ヶ崎』庄和町尾ヶ崎遺跡調査会

白鳥良一1989「前期大木土器様式」『縄文土器大観』小学館

鈴木素行1985「原町西遺跡発掘調査報告書」『古河市史資料集』第９集　古河市史編さん委員会

鈴木徳雄1979「諸磯式土器文様の変遷について」『白石城』埼玉県遺跡調査会

鈴木徳雄1987「諸磯式土器研究の問題点」『第１回縄文セミナー縄文前期の諸問題』群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所・北武蔵古代文

鈴木徳雄1989「諸磯ａ式土器研究史(1)」『土曜考古』第13号　土曜考古学研究会

鈴木徳雄1994「諸磯ａ式の文様帯と施文域」縄文時代第５号　縄文時代文化研究会

鈴木徳雄1996「諸磯ｂ式の変化と型式間交渉」縄文時代第７号　縄文時代文化研究会

関根慎二1986『糸井宮前遺跡Ⅱ』関越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査報告書第14集　群馬県埋蔵文化財調査事業団

関根慎二1999「群馬県における諸磯ｂ式土器の細分」『第12回縄文セミナー前期後半の再検討』　縄文セミナーの会

大賀　健ほか1998「川白田遺跡」川白田遺跡調査会

高橋　誠ほか1994「木戸先遺跡」印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第79集　印旛郡市文化財センター

田中　豪1984「花前Ⅰ遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』千葉県文化財センター

田中和之1990「縄文時代前期中葉の土器群の問題点」『埼玉考古』第27号　埼玉考古学会

田中和之1991「天神前遺跡」蓮田市文化財調査報告書第17集　蓮田市教育委員会

田中和之1994『天神前遺跡－第25調査地点－』蓮田市文化財調査報告書第21集　蓮田市教育委員会

田中和之1998「峯岸北遺跡」大宮市遺跡調査会報告第59集　大宮市教育委員会

田中和之　1999「掛貝塚」『埼葛地区文化財担当者会報告書』第３集　埼葛地区文化財担当者会

谷口康浩1989「諸磯式土器様式」『縄文土器大観』小学館

谷口康浩ほか1999『志村遺跡第６地点発掘調査報告書』凸版印刷工場内遺跡調査会

玉井庸弘ほか2000「ヲイノ作南遺跡発掘調査報告書」八千代市遺跡調査会

土屋　積ほか2000「日向林Ａ」上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16　長野県埋蔵文化財センター

富沢敏弘1985『中棚遺跡』関越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査報告書　群馬県昭和村教育委員会・群馬県教育委員会

中西　充ほか1983「宇津木台遺跡群Ⅱ八王子市宇津木台地区遺跡調査会

中村誠二2001『山崎貝塚』浦和市内遺跡発掘調査報告書第29集　浦和市教育委員会

野中松夫1983「江ヶ崎貝塚」蓮田市文化財調査報告書第５集　蓮田市教育委員会

原　雅信1985「清水山遺跡」群馬県教育委員会

羽生淳子1983『稲荷丸北遺跡』ニューサイエンス社

早坂廣人1995「水子貝塚」富士見市文化財調査報告書第46集　富士見市教育委員会

昼間孝志1984「三ヶ尻林(2)・台」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第34集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

細田　勝1989「黒浜式土器成立の背景について」『古代』87号　早稲田大学考古学会

細田　勝1999「南関東における諸磯式土器の様相」『第12回縄文セミナー前期後半の再検討』　縄文セミナーの会

堀江　格1995『下ノ平Ｄ遺跡』福島市埋蔵文化財報告書第77集　福島市教育委員会　福島市振興公社

堀越正行1988「市川市中台貝塚出土土器の再吟味」『MUSEUM 千葉』第19号　千葉県博物館協会

堀越正行1988「水子式土器考」『史館』第20号

前原　豊ほか1990「芳賀団地遺跡Ⅲ」芳賀団地遺跡群第３巻　前橋市教育委員会

松田光太郎1994「愛宕山遺跡」群馬県富士見村教育委員会

松田光太郎1993「諸磯ａ式土器の文様と変遷」『古代文化』46巻６号　古代学協会

丸山康徳1993「宇輪台遺跡」福島市埋蔵文化財報告書第58集　福島市福島市教育委員会　福島市振興公社

宮井英一1985「大林Ⅰ・Ⅱ　宮林　下南原」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第50集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

村上伸二ほか1994「山根遺跡」『比企郡市における埋蔵文化財の成果と課題』　比企地区文化財担当者研究協議会

山下歳信1986「上大屋・樋越地区遺跡群」大胡町発掘調査報告書Ⅲ　大胡町教育委員会

山本正敏1999諸磯ｂ式土器をとりまく中部・北陸の土器」『第12回縄文セミナー前期後半の再検討』　縄文セミナーの会

若月省吾1980「笠懸村稲荷山遺跡」笠懸村埋蔵文化財調査報告書第３集

和田雄次1983「新池台遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第17集』茨城県教育財団

研 究 紀 要　第17号

２００２

平成14年３月25日　印　刷

平成14年３月29日　発　行

発　行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里村船木台4－4－1

電話　0493－39－3955

印　刷　関東図書株式会社